うさうしてあゝ云ふ人物を作り出したのは、さうしなければゐられない必至なものが作者を導いたのであらう。大菩薩峠は書いてゐるうちにだん〳〵手に入つて來たやうで、最初の方は隨分たど〳〵しい筆つきであるが、しかしじつくりと落ち着いて書いてゐて、無器用な中にさう云ふ感じの出てゐるところが不思議である。尙又この作者は、場面を江戸や、上方や、紀伊や、伊勢や、甲斐や、信濃や、武藏や、方々へ移してゐるが、その時の都合で勝手な所へ持つて行つたのではなく、それらも何か必然に作者の心を牽き寄せる因緣があつたかの如く、ほんたうにそれらの土地に愛着を抱き、忘れがたないなつかしみを以て書いてゐるのが感ぜられる。想像するに、此の人は旅行癖があつて諸國の地誌や風俗人情に興味を持ち、嘗ては机龍之助の如く放浪した時代があるのであらう。取り分け作者は「大菩薩峠」と云ふ標題が示すやうに、武州、甲州、信州あたりの高原や山峽の風物を好むらしく、實にたび〳〵、くどい程あの邊が使はれてゐるのである。私は、雪ちやんとかお松とか云つた娘が朝早く馬の背に乘つて青梅街道(?)を江戸へ出るところ、遠く秩父の連山を望むあたりの描寫を今も忘れない。別段叙景が神に入つてゐると云ふのではないが、作者自身があの街道を何回も往復したことがあつて、あの武藏野の一角の情趣を愛惜する心持ちが現はれてゐるからであらう。伊勢の合の山にしても、龍神、白骨の溫泉にしても、皆さうである。念を入れて叙景の筆を費してゐる譯ではないが、何かしらその土地の匂ひ、土の色、空氣の色と云つたものが出てゐる。この作者がしば〳〵口にするカルマとか流轉の相とか云ふのはどう云ふことかよく分らないが、あれを讀むと私なども龍之助や七兵衛や米友の跡を追つて果てしもない漂泊の旅に上つてみた

いやうな氣になる。そして伊勢などへ旅行すると、何よりもあの小說中の人々の身の上が想ひ出されて、旅情を豐かにするのである。ところで南國太平記には、かう云ふ風に作者を必至に驅り立てゝゐるものがない。書かずにゐられないで書いた、と云ふ樣子が見えない。直木君の云ふやうに大菩薩峠は餘りだら〳〵長くなり過ぎて收拾がつかないやうになつてゐるらしく、構造にも文章にもムラがあり、首尾照應せぬ憾みがあるけれども、この重要な一點に於いて南國太平記を拔いてゐる。

○

それから、明治以來久しくわれ〳〵が捨てゝ顧みなかつた「劍の文學」と云ふものを、あゝ云ふ風な立派な物語の形にして再び我が文壇へ持ち來たしたことも、介山氏の功績としなければならない。何と云つても、これは純粹にわれ〳〵日本人だけの文學である。西洋の小說にも劍て果たし合ふところは澤山あるし、支那でも水滸傳などは血腥い立ち廻りて埋まつてゐるが、しかし劍の果たし合ひそのものを、もしくは白刃の魅力と云ふやうなものを主題とし、更に進んて劍禪一如の境地などを創作の目標としたものは、恐らく日本だけにしかあるまい。いや、日本にも思想としてはあつたけれども、從來は講釋師が飯の種にしてゐたゞけて、小說の畑へ植ゑ付けたのは介山氏が始めてあるかも知れない。大菩薩峠の特異なところは、立ち廻りの場面は勿論として、全體に一種の劍氣がたゞよつてゐる點にある。立ち廻りの多いのはあの小說の初めの方だけて、先へ行く程だん〳〵それが蔭へ隱されてしまひ、しづかな、しんみりした情景が多くなるが、それてゐて、龍之助の現はれる所には必ず陰慘な劍氣が伴ふ。讀者

は龍之助を見れば劍を思ひ、劍を見れば龍之助を思ふ。劍と龍之助とが一體となつて離れない。大菩薩峠の後に類似の劍劇小說が數知れず現はれたけれども、皆チヤンバラを表面へ出して書いてゐて、斯くの如き境地へ這入り得たものは一つもない。これが介山氏と他の大衆作家との異なる所以で、これだけは直木君も認めて然るべきだと思ふ。が、さうは云ふものゝ、南國太平記も亦一個獨自の天地を持つた作品であつて、介山氏とは自ら違つた味がある。大菩薩峠の出現が直木君に刺戟を與へ、あゝ云ふものを書かせる機運を作つたのではあらうけれども、これは模造品の類とは違ふ。大菩薩峠にはやゝ劣ると思ふけれども、確かにそれに次ぐ巨篇である。そして場面の轉換とか、筋の運びとか、全體の締めくゝりとかはこの作者得意の壇場であつて、スリルや、ギヤツグや、サスペンスなどの挿み方も活殺自在であり、大菩薩峠のたゞ〳〵しいのとは比べものにならないので、さう云ふ點では介山氏を冷評するだけのものはある。第一直木君は、介山氏が信濃の國を二度も三度も舞臺に使つたやうな間の拔けたことをやらない。劈頭に牧の師匠である兵道家の玄白齋が、山中で血だらけな犬の死骸を抱へた獵師に遇ふ。次回で玄白齋は牧が調伏の術を行つた岩の痕を發見し、何處からともなく異樣な呻きごゑを聞く。三回でその呻きごゑの主が今の獵師であつて、路傍にむごたらしく殺されてゐるのを見る。四回と五回で玄白齋が牧一味の行動に疑惑を生じ、俄かに山路を麓へ急ぐ。六回で麓へ下りた玄白齋が從者の和田仁十郎を走らして馬を求める。七回で仁十郎が百姓小屋へ辿り着くと、一と足違ひに四人の武士がたつた馬へ乘つて去つた跡である。八回でその四人の武士が今獵師を斬つた牧の一味であることが分り、玄白齋が裸馬を驅

つて追ひかける。と、此の「追つかけ」て場面が一轉して、齊彬の長子寛之助が物怪に怯えてゐる病室になる。この間が原稿用紙にしたら多分三四十枚であらう。斯くの如く短かい間にスピーディーな展開を見せて五分の隙もなく、而も一回々々後を引くやうに書いて行く手際は、まことにしたゝかなものである。そして讀者の好奇心は此の開卷第一の「追つかけ」から、あの尨大な全篇を通じて、最後の齊彬の臨終と牧の殺されるところまで、弛みなく引つ張つて行かれるのである。大菩薩峠も南國太平記も共に最初は新聞へ連載されたのであるが、ジャーナリズムの立ち場から連載物として孰方を取るかと云へば、恐らく軍配は後者に揚がるであらう。昔、夏目先生が、朝日の紙上へ「三四郎」や「それから」を書いてゐた時分、何處から聞いて來たのだか小山内君が首をかしげて「先生は新聞小説を書く以上その日その日にヤマがなければいけないと云つて、その方針て書くんださうだが、どう云ふものかね、さう云ふ書き方は。僕にはちよつと――」と、眉を寄せてゐたことがあつた。小山内君は夏目先生に輕い反感を持つてゐた時代があるやうだから、本氣て云つたのかどうだか分らないが、初めから新聞に書かないなら格別、書く以上は夏目先生て誰てもそのくらゐな心がけはあつてもよからうし、さう云ふ技巧を馬鹿にしてはならない。假りに舞臺の俳優がお座敷の餘興場へ呼ばれゝば、狹い所なら狹い所のやうに踊る。鴈治郎ても中座てやる時と歌舞伎座てやる時とは、聲のメリハリを加減するてあらうし、見物の多い少い、客種の如何なども考慮に入れることがあるてあらう。小説はその場限りのものてはないから、知己を後代に待つと云ふ見識は見識として、そのくらゐな融通の利く腕を備へてゐることも、作家たる一つの資格てはないか。尙

餘事ながら、新聞へ連載する小說と、雜誌へ寄稿したり又は書きおろしを單行本で出す小說とは、今日でも既にさうなりかけてゐるが、これから後は、追ひ〳〵裁然と技巧が分れて來て、作家も孰方かを專門とするやうになり、小說家と脚本家程の違ひが出來て來るのではないか。同じく文學であつてみれば、傑れたものは孰れにしても後まで殘ることであらうが、新聞の方は一回毎にヤマを盛つて讀者を釣つて行くと云ふ制約を受けながら、尙且文學の本來の使命を果たさうとすれば、作者としての天分と、映畫製作者のそれに似た才能とを兼ね備へてゐなければならず、從つて今後の連載物は一種獨特な發達を遂げるでもあらう。現在ではまださう云ふ方面の研究が充分でなく、大佛君の「由井正雪」などはその點で失敗したらしいが、南國太平記は明かに新聞小說家の意識を持つて書かれてゐ、此の作品が出てから後、次第に作家の間に今云つたやうな區別が生じて來た。されば時代的に見て、南國太平記の演じた役割は相當に大きいものであるかも知れぬ。

○

此の小說は作品も作家の氣質も、大菩薩峠の對蹠地にあるものだから、介山氏に見るやうなしんみりした落ち着きはないけれども、一方にそれを補うて餘りある長所がある。立ち廻りでは叡山に於ける月丸、深雪、庄吉の惡鬪が壓卷であらうが、大菩薩峠の「だんまり」の凄さとすれば、これはタテ師が智慧を絞つて千變萬化の形をつけた型破りの活劇であり、三個の肉團が草を踏みにじり、砂煙を上げ、土を蹴つて相搏つところ、ぱつぱつと、瞬間的に血走つた眼が見え、虛空を摑む手が見え、逆立ちになつた脚が

見えて、正に映畫のカッティングの妙味てある。立ち廻りに限らず、濃艶、悲痛、滑稽、いかなる場面を描いても此の作者は常にキビと緊張してゐて、描寫に腐つたところがない。手つ取り早く、さつさつと筋を運んて、而も書くだけのものは書き、出すだけの氣分は出し、その上テムポの快さがある。たび〳〵云ふ通り此の手際には敬服するが、しかし此の作品の難を云へば、個々の場面と場面との間に、穴があき過ぎてゐるやうに思ふ。と云ふ意味は、あれを歴史小説として見る時、いつたいどれだけの期間にあゝ云ふ事件が起伏したのか、寛之助の死と齊彬の死との間にどのくらゐの年月が經つのか、時間の關係が明かてない。それと云ふのが、作者が面白い事件ばかりをピックアップして、説明に墮するやうなところを省いたゝめに、事件と事件との必然のつながりが切れてゐるのてはないか。玄白齋と牧との術くらべ、小太郎の復讐と云ふ本筋は一貫してゐるけれども、それと絡み合つてお家騒動の背景を成してゐる時勢の推移、政治的、社會的に世の中が變つて行くすがたが、全然書いてなければだけれども、書いてある割合には迫つて來ない。齊彬とか、西郷とか、大久保とか云ふ人物の天下國家を憂へてゐる樣も、ところどころに出て來るが、何となく突然に出て突然に引つ込んてしまふやうて、蔭にさう云ふ人々の大きな力の動いてゐるのが感じられない。パラパラに讀んては面白いけれども、かう云ふ順序てかう云ふ形勢を持ち來したと云ふ、一つ〳〵が次ぎ〳〵に因となり果となりつつ澎湃と盛り上つて來る氣がしない。これは作者に力量がないと云ふよりも、やはり新聞小説としての特長を尖鋭にするために、あまり全體を壓縮し、枝葉を剪り過ぎたせゐてあらう。春陽堂の廉價本て各冊四五百頁のものが三冊と云ふ長大篇てはある

が、あれだけの出來事を扱ふには實はあれても短か過ぎる。先づ少くともあの倍の長さは必要てあらう。そこへ行くと「源九郎義經」の方は書き下しの單行本てもあり、純粹の歴史物てもあるのて、作者は何の遠慮もなく、すつかり腰を据ゑて書いてゐる。最初に私は上卷と中卷とを受け取つた時、六條判官爲義の最期が卷頭に出て來るのを見てその着眼の遠大なのに驚いたが、中卷の終りがまだ漸く源三位頼政の討死までしか進展してゐないのて、この調子て下卷て收まりがつくのだらうかと案じてゐたら、今度下卷が出たのを見ると、鵯越の合戰を以て終つてゐて、まだまだ續篇續々篇が何冊ても出さうな勢ひてある。古來源平の爭ひや頼朝義經の傳を記したものは汗牛充棟もたゞならぬてあらうが、私は實に斯くの如き大規模の著作あるを知らない。況んや稗史小説の類に於いてをや。又況んや近代の形式内容を備へた創作に於いてをや。これが德川時代に出た馬琴の歴史物などといかに違ふかと云ふことは、弓張月の信西と此處に出て來る信西とを比べてみても分るてあらう。弓張月の方ては芝居の公卿惡のやうな憎まれ役として登場してゐるが、此處ては信西と云ふ人物を、公平に、人間的に見て、その治績を擧げ、煩悶を述べ、弱點を說いて、一縷の同情を禁じ得ないやうに描いてゐる。私は卷頭の爲義が白木の輿の中てふるへてゐるところが一番好きだが、試みにその一節を引いてみよう。

七條、朱雀の、淋しい町てあつた。松明の灯に、照らし出されてゐる白木の輿の中から

「たばからずとも、よいてあらうが、たばからずとも」

と怒つてゐる心を、力の無い聲に含ませて、ふるへる兩手て、輿の戸を、がたがたさせながら、外へ出ようと——老いた齡からだ

けてはなく、戰に破れた苦勞て、痩せた膝を立てて、――助かると思つてゐた命が、その家來の手て、今こゝて、失くなると知つた口惜しさと、恐怖に、脚を、ぶる〳〵顫はせながら――輿丁の置いた草履を、脚のふるへの爲に、足ものせられずに、右へずらしたり、左へずらしたり――

又曰く、

「何處て斬るぞ――何處て」

爲義は、輿へ手をかけて、蒼白な顏をしてゐた。義朝へ、命乞ひをする爲に、叡山西塔の北の谷、黑谷て、頭を剃り、義法房といふ名となつて、その子の義朝を賴んてきた爲義は、その剃りたての頭を、秋初めの寒い夜風に吹かれながら

「河原か――森か」

秦野次郎近景が

「最後の御念佛遊ばして下されますやう」

と、强い聲て――だが、地へ手を突きながらいふと、

「さうか――こ、此處てか――此處て、斬るか――南無阿彌陀佛、々々々々々々々々、こゝて、斬るのか、南無阿彌陀佛、々々々々々々」

ぢつと、眼を閉ぢて、口の中て、念佛を唱へてゐる內に、鎌田が、眼て、合圖をした。郎黨が、熊の皮を、輿の前へ敷いた。

作者はかう云ふ風に、遠い時代の英雄化された人物を近々と引き寄せて、當今の政治家實業家を見るやうに人間臭く浮かび出させてゐるのである。苟くも源家の棟梁たる武將が死に臨んてこんなにふるへたり怒つたりしたかどうか知らない。しかし平治の亂の爲義は大分老耄してゐたやうに想像されるし、心中の感慨は恐らくこれに似たものがあつたてあらうから、それを動作や言葉に現はしても差支へあるまい。そのくらゐな自由を許

さなかつたら、古典文學の外へ出ることが出來ない。要は史實を曲げないやうに、そして滑稽や低俗に墮さないやうにして、それだけの働きをつけることとてあるが、作者はそのコツをよく心得て、時代錯誤に陷らずに、歴史を現代化するむづかしいカネアヒを縫つて行く。今の人には、朝長のやうな弱い性格は却つて書き易く、義朝のやうな線の太い、生一本な性格は書きにくいものだが、それも偶像化されずに、いかさまかうてもあつたらうかと思はれるやうに出來てゐる。作者の筆はこの義朝と常盤との閨中の會話にまで及んで「お主は、わしと、清盛と、何つちが、好きかなう」と義朝に云はせたり、常盤に義朝の頸の毛を引つ張らせたりしてゐるが、かう云ふところは、書ければ書くに越したことはないけれども、架空の人物なら格別、歴史に實在する人物だと、それも齊興とお由羅ぐらゐな近いところてなく、義朝と常盤になつて來ると、なか〳〵正面からは書きにくい。私に「信西」と云ふ一幕物があるが、あれは實は住吉慶恩の繪卷から思ひついたので、あの後にもう一と幕義朝が出て來るところがあつたのだけれども、どうも義朝と云ふものが歌舞伎の赤つ面のやうになつてしまふので、一幕物にちゞめたのである。何しろ時代の隔たりがあり過ぎるので、品よく書けば雲を摑むやうなたわいないものになつてしまふし、現代式にやつつければ道化じみるし、どつちにしても氣がさして工合が悪いものだが、此の作者はズバと書いてのけて、それがそんなにはしたなくも、可笑しくもない。これは一つには武將や女房の言葉づかひが巧く行つてゐるせゐて、大間に、世話に碎けぬやうに運ばれてゐて、公卿と武將との對話などに用ひられる「候言葉」に多少こなれないところが見えるけれども、それとても殆んど氣にならない。

○

義經を書くのに、爲義から始めるのは大がかり過ぎると思つたが、成る程からして讀んでみると、やはりその必要のあつたことが分る。作者は殊に、義朝と常盤との關係、常盤の位置、正室たる熱田大宮司の女の腹に生れた頼朝と、側室たる常盤の腹に生れた義經との待遇上の懸隔等を說くことに力を注ぎ、まだ母の胎内にある時から義經の前途に繼兒的な運命が待つてゐることを暗示してゐるが、これは平治物語にも平家にも義經記にも見ないところで、私はこゝから書き出した作者の慧眼に服し、こゝにこの小說の新味を認める。そしてこゝでは、平治の亂から、義朝義平の死、牛若丸の奥州下り、源三位頼政の旗揚げ、石橋山の合戰、義仲を始め諸國源氏の蜂起、宇治川、一の谷の合戰と、平家から源氏へ時代が移り、義經の登場して來るまでが、周到な注意を以て順序よく展開されてゐる。が、惜しいことに義朝の最期あたりまでが最もよく、先へ行く程筆が聊か荒んでゐるやうに思はれるのは、作者の健康のためであらうか。たとへば中卷の重盛諫言など、日本外史や團十郎の活歷は云ふ迄もなく小中學校の敎科書にまで度々使はれる有名な事件であるから、此の作者としてもう少し別な特色を出せなかつたものであらうか。「世に四恩と申す事がござりまする、心地觀經に申すらく、一に天地の恩、二に國土の恩云々」と云ふあの長臺辭を一と息に「朗讀」させるのは、何としても曲がなさ過ぎ、こゝばかりは全く張り扇の音が聞える。重盛と云ふ人間もあまり敎科書じみてゐる。平家物語の重盛であつて、愚管抄の重盛らしいところが見えない。しかし、過日も改造の山本社長から聞いた話に、氏の容態はその後依然として面白か

らず、武州富岡に轉地して徐ろに療養を加へながら稿を續けてをられると云ふ。病氣のことは氏が自分で書いてゐたのでかねがね承知してゐたが、源九郎義經の下卷を見ると、この强情な作者が病苦と鬪ひながら辛じて中卷を脱稿したことを白狀してゐる。私なんぞはほんの少々身體に違和を生じても直ぐ筆を投げてしまふので、さう聞いてみればその我慢强さと壯烈な覺悟に忸怩たるばかりである。ずうつと昔、震災前の歌舞伎座で羽左衛門が助六の水入りを出した時、何でも冬のことであつたが、私が見に行つた日は風邪で四十度も熱があると云ふのに、あの天水桶の水の中へ跳び込んだ。私は直木君の話を聞いて、圖らずあれを思ひ出したが、それでも俳優と作家とは仕事の性質が違ふのだから、こゝで暫く加餐しても興行主や觀客に迷惑をかけないやうな方策があらうてはないか。「直木は强情だから忠告しても駄目だ」さうだが、澤正のやうになつてしまつては馬鹿々々しいし、さう云ふ無茶は自ら重んずる人のすることとてない。折角未曾有の歷史小說に手をつけ出したことであるから、充分休養して健康の恢復を待ち、最後まで體を崩さずに完成されることを祈つて已まないし、その上で私も今一度批評の機會を得たい。尙又、これを書いてゐる途中、三田村翁の「大衆文學評判記」と云ふ本が出たのを廣告で知り、早速取り寄せて讀んで見たところ、我が國に於ける歷史小說と云ふものゝむづかしさを又改めて敎へられ、いろ〳〵考へたこともあるので、次ぎの機會には直木君の批評を離れて「小說の形式について」と云ふ題で書いてみよう。

# 東京をおもふ

○

想ひ起す、大正十二年九月一日のことであつた、私は同日の朝箱根の蘆の湖畔のホテルからバスで小涌谷に向ふ途中、蘆の湯を過ぎて程なくあの地震に遭つたのであるが、そこから徒歩で崖崩れのした山路を小涌谷の方へ降りながら、先づ第一に考へたのは横濱にある妻子共の安否であつた。私は家族と八月の初旬から小涌谷ホテルに暑を避けてゐたが、一日から娘の學校が始まるので、二十九日の晩に妻と娘とを送つて一旦横濱へ歸り、自分だけ又戻つて來て三十一日の夜から蘆の湖畔へ遊びに行つ

てゐたのである。私は大の地震嫌ひて、天明や安政の大地震の話や地震學者の說などをかね〳〵注意して聞きも讀みもしてゐたので、今、自分がかうして山路を辿りつゝある最中、横濱では大火災が起つてゐるに違ひないと思つた。自分の家は決して潰れないと云ふ信念があつたが、しかし渦まく焰の中をかよわい者共はどうして逃げ終せることが出來よう。いや、それよりも、瞬時の猶豫なく立ち退いて市中を突破しなければ、忽ち八方から火に包まれることを彼等は知つてゐるだらうか。なまじ家が潰れないので、まあ助かつたと、ぼつとしてゐるのではないであらうか。自分がゐたらそんな油斷はさせないが、恐らくそこまでの分別はあるまい。私の眼には、右往左往に逃げまどふ群集に交つて、火に追はれつゝ彼方へ走り此方へ走りする彼等が見えた。やうやう一方の活路を見出だして行くと、其方にも火の手が揚がつてゐる、又引き返して外の路を行くと、其方にも火の手が揚がつてゐる、次第に絶望し、氣力を失ひ、折角助かつたと思つた喜びがあきらめに變つて、父の名を呼び夫の名を呼びつゝ行き倒れる。私の頭には、想像し得られる最も傷ましい可憐な彼等の姿が浮んだ。今、私を呼び續けつゝだん〳〵細くなつて行く哀しい聲が聞える氣がした。私は幾たびか横濱の方と思はれる空を望んだ。が、それでも萬一と云ふ希望が持てたのは、東京よりも横濱の方が町が小さいだけに、市中を拔け出ることも容易てある、私の家は樹木の多い山手の居留地にあつて、市の中心から離れてゐるので、海の方へ逃げれば駄目だが、もしひよつとして、運よく反對の方へ逃げ出したら、或ひは早く郊外の廣い所へ出られるかも知れぬ。それも、現に今その方へ走りつゝあるのてなければ遲い。私は彼等の脚の速力と郊外までの距離とを測つた。最短距離、最

長距離、最も火災を起し易い途中の建物、崖崩れのありさうな路、「あ、そつちへ行つてはいけない、此方だ此方だ」と、私は心の中で叫んだ。私は又、首尾よく彼等が助かつたとして、再び彼等に遇へるのは幾日後であらうかと思ひ「早くて一箇月の後」でなければなるまいと算定した。なぜなら私は災害の程度を非常に大きく考へて、東京横濱は殆んど灰燼に歸してしまひ、二つの大都會の人口の過半は失はれて、あらゆる社會機構、交通も秩序も滅茶々々になつてしまふであらうと考へたのである。後になつてみると此の想像は少し大袈裟過ぎたけれども、私には今の地震が、古來六七十年目毎に關東を襲ふ週期的大地震の一つであつて、それが内々恐れられてゐた通り、ちやうど廻つて來たものであると思へた。さうだとすれば、今の東京の人家と人口の稠密さは、安政度の江戸の比ではない。建物も洋風の建築が殖えて、而もそれらが外觀は立派だけれども、古いものは地震に何よりも脆いと云はれる煉瓦造り、新しいものは木ずりの上へ壁を塗つた、博覽會の建物のやうな、火事には恰好な燃料である張りぼてが多い。その上に昔はなかつた瓦斯だの電氣だの石油だのその他いろいろの爆發物があり、それらを大量に使用し又は貯藏する工場や倉庫がある。とすると、人命の損失と、家屋の倒壞燒亡の數は想像に絶するものがあらう。安政の災害は本所深川が最も激しく、他はそれ程でなかつたと云ふが、今度は恐らく下町全體がやられるであらう。倒壞を免れた家屋はあつても、火が諸方から起り、且火の廻りが早いとしたら、山の手とても無事ではあるまいし、日本橋、京橋、下谷、淺草、神田邊の住民は、悉く逃げ場を失つて燒け死ぬであらう。東京がさうだとすれば、よし助かつたとしても家族共は何處へ頼つて行くか。妻と、娘と、妻の老母と、兄弟たちとが、逃

げる間に散り散りにならないものでもないし、彼等が互ひにめぐり會つて一個所へ集まるのは果たして幾日先のことか。私は自分の親戚を見渡して、たつた一軒、上州の前橋にゐる妻の兄だけが息災であらうと考へられたので、そこから燒け野原の東京や横濱へ人を出してくれ、雲を摑むやうな捜索をすることになるのではないかと思つたりしたが、一箇月後と云ふ算定はさう云ふ想像に基いたのであつた。

○

私が遭難した場所は小涌谷の半里程手前であつて、そこから小涌谷へ歩いて行く途々、私の腦裡には以上のやうな憂慮とも妄想ともつかぬものが、しきりなしに去來したのである。しかし私は、さう云ふ悲しいことばかりを思ひ詰めてゐた譯ではない。時間にしたら三十分か一時間ほどの間だけれども、その間には妻子共の傷ましい姿に交つて、それとは全く違つた種類の幻影が、ときく眼の前を掠めたのであつた。斷つておくが、大正十二年と云ふと私は三十八歳である。そして横濱に住んでゐたと云ふのは、大正活映のプロダクションに關係してゐたゝめでもあるが、實は東京と云ふ所が嫌ひになつてゐたからでもあつた。私はフィルムの仕事に携はる前、大正六年頃から始終伊香保や鶴沼へ轉地して、東京の家に居着かなくなつたのであるが、大正八年の十二月に本郷曙町の家を疊んで小田原の十字町へ移り、十年に横濱へ越して來たのである。だが、いかに東京最負の人でも、あの時分、世界大戰當時から直後に及ぶ好景氣時代の帝都を、立派な「大都會」だと思つた者はないであらう。その頃の新聞紙は筆を揃へて「我が東京市」の交通の亂脈と道路の不完全とを攻擊した

ものであつた。たしかアドヴアタイザー紙であつたかゞ社說で東京市の不體裁を散々にコキおろして、日本の政治家は社會政策だの勞働問題だのと大きなことばかり云つてゐるが、政治と云ふのはそんなものではない、先づ此の首府の泥濘を始末して、雨が降つても無事に自動車を通せる道路を作ることだと云つてゐたのは、しみ〴〵同感したゞけに今も覺えてゐるのである。「東京は都會ではない、大きな村だ、或ひは村の集合だ」と云ふ惡罵は、日本人も外人も口にした。當時二重橋外の廣場は夜更けてから自動車の往來が頻繁なために道路の破損することが最も甚しく、乘客は凄じい動搖を感じたので、彼處は玄海灘だと云はれた。私は淺草橋から雷門へ行く間で、クションから激しく跳ね上げられ、箱の天井でいやと云ふ程鼻柱を打つた覺えが二度ばかりある。氣がついてみると、自動車の箱の天井は柔かい布が張つてあるが、ちやうど眞ん中あたりのところに固い棒が這入つてゐて、跳ね上げられると、そいつが鼻へ打つかるやうな位置にある。こいつは危險だ、たび〴〵こんな目に遭ふと今に鼻血を出すやうなことになると思つたが、鼻血どころではない、とう〳〵そのために死んだ人があると云ふ噂さへ聞いた。それなら電車はどうかと云ふのに、これが又死に物狂ひであつた。今から考へると、かう云ふ亂脈にも一面無理のない事情があるので、何しろ財界の活況につれて諸種の事業が俄かに勃興し、地方の人間が皆都會へ集まつて來る。東京市は此の慌しい人口の增加と郊外地帶の膨脹に對して、急に應ずる暇がない。道路を鋪裝するとか、アパートを建てるとか、そんな施設をする間もなく、どん〴〵自動車が輸入され、場末の方には木ッ葉のやうな安普請の借家が殖える。そのくせ高い家賃を出しても、中々家が見つからない。庶民

階級の交通機關は路面電車だけしかないので、來る電車も來る電車も滿員で、長い間停留場に立ちん坊をさせられる。ラッシュアワーには全く殺人的な騷ぎで、夕方、腹を減らしてイラ〳〵しながら、歸路を急ぐ會社員や勞働者などが、車掌の制するのも聽かばこそ、もう鈴なりになつてゐる車臺へ我れ勝ちに割り込まうとする。その爭ひのために尙混雜して、中の者は出ることが出來ず、外の者は乘ることが出來ない。そして乘り損なつた者は蒼白な顏で恨めしさうに電車の影を見送つてゐる。さう云ふ人々の物凄い眼を見ると、私はしば〳〵慄然とした。いつも乘れるのは一人か二人で、大部分は置いてき堀を食ふのであるから、市電に對する怨嗟の聲は巷に充ち充ちてゐた。留まつた電車の昇降口に群集が黑山のやうにたかつて、押し合ひ、へし合ひ、罵り合ふ騷擾が、いかに人心を險惡にさせてゐるかは、誰しも私かに憂へたところで、それを放置してゐる爲政者の氣が知れなかつた。彼等の狼のやうに尖つた、怒りに燃えた顏つきを見ては、怨嗟の聲がいつ何時もつと上層の階級へ向けられるかも知れない、日本人だから辛抱してゐるが、歐米の都會で市民を斯かる狀態に置いたら一日で暴動が爆發すると說く人もあつた。その外電話なども電車と同じやうな有樣で、これが又店員や事務員の神經を苛立たせた。亞米利加あたりでは電話會社へ申し込むと五分も經てば取り附けに來ると云ふのに、日本では埒が開かないから高い金を出して電話屋から買ふのだが、それも好景氣で途方もない値を呼んでゐる。そしてやう〳〵取り附けた迄はいゝが、電話の數に比例して交換手の手が足りないのか、交換局を呼び出すさへが容易でない。出ても直ぐに引つ込んだり、番號を聞き違へたり、混線などが始終である。やつと繋いでくれたかと思ふと、

話中をポン〳〵切られる。腹が立つて又交換手を呼び出すと今度はあべこべに「お話中」を食はされる。毎日電話口で交換手と喧嘩したり、ベルをガリ〳〵と燒け糞に鳴らしたりすることが珍しくない。怒鳴られる交換手の役も大抵てはないてあらうが、急用を控へた店員たちのイキリ立つのも尤もて、私が未だに電話嫌ひてあるのも、電話は人を神經衰弱にさせるものと云ふあの時以來の觀念が拔けないからてある。市内てもそんなてあるから、横濱から東京を呼び出すのには半日もかゝり、往つて復つて來た方が早いくらゐ、いや、ほんたうに早かつたのてあつた。それから瓦斯もいけなかつた。私の本郷の家ては、壓力が足りなかつたり、空氣が交つて消えてしまつたりして、臺所の者がぶつ〳〵云つた。今日てこそ日本の雜貨は世界を席捲してゐるが、あの時分は我が國の工業が先進國の幼稚な模倣ばかりをしてゐる試練時代にあつたのてあらう、凡そ國產品と名のつくものに碌なものはないやうな氣がした。私はたび〳〵マッチて腹を立てたことがあつた。と云ふのは、大概なマッチは擦るとシュッと燃えたきり、棒の先て消えてしまふ。一本の煙草に火をつけるのに四本も五本も擦らなければならない。懷中電燈などもさうてあつた。電池と電球との接觸が不親切に出來てゐるので、買ふともうその歸り路てスキッチが利かなくなる。當時日本の活動寫眞ては尾上松之助が大持てゝあつたが、あれが我が國の文化の程度を象徵してゐたと云つていゝ。舊き日本が捨てられて、まだ新しき日本が來たらず、その孰方よりも惡いケーオスの狀態にある、さうしてそれが、亂脈を極めた東京市のあらゆる方面に歷然と現はれてゐたのてあつた。

○

さう云ふ感を催したのは私ばかりではなかつたてあらう。全く、あの松之助の寫眞を見ては、日本人の劇、日本人の顏が悉く醜惡なものに思はれ、あれを面白がつて見物する日本人の頭腦や趣味が疑はれて、日本人てありながら日本と云ふ國がイヤになつた。あの頃の私は、帝國館やオデオン座あたりへ行つて西洋映畫を見るより外に樂しみはなかつたものてあるが、松之助の映畫と西洋のそれとの相違は、即ち日本と歐米との相違てあるとしか思へなかつた。私は西洋映畫に現はれる完備した都市の有樣を見ると、ます〳〵東京が嫌ひになり、東洋の邊陬に生を享けた自分の不幸を悲しみもした。もしあの時分に金があり、妻子の束縛がなかつたならば、多分私は西洋へ飛んて行つて、西洋人の生活に同化し、彼等を題材に小說を書いて、一年ても多く向うに留まつてゐたてあらう。大正七年に私が支那に遊んだのは此の滿たされぬ異國趣味を纔かに慰めるためてあつたが、旅行の結果は私を一層東京嫌ひにし、日本嫌ひにした。なぜなら、支那には前清時代の俤を傳へた、平和な、閑靜な都會や田園と、映畫て見る西洋のそれに劣らない上海や天津のやうな近代都市と、新舊兩樣の文明が肩を竝べて存在してゐた。過渡期の日本はその一つを失つて、他の一つを得ようともがいてゐる時代てあつたが、自分の國の中に租借地と云ふ「外國」を有する支那に於いては、此の二つが相犯すことなく兩立してゐた。私は北京や南京の古い物寂びた町々を見、江蘇、浙江、江西あたりの、秋とは云ひながら春のやうに麗らかな、のんびりした田舍を歩いて、多分に浪漫的空想を刺戟され、地上に斯くの如きお伽噺の國もあつたのかと云ふ感を抱いたが、天津や上海の整然たる街衢、清潔なペーヴメント、美しい洋館の家並みを眼にしては、歐羅巴の地を踏んてゐるやう

な嬉しさを味はつた。就中上海は當時の東京や大阪よりもいろいろの施設が遙かに進んでゐて、もうその頃から四つ辻には交通巡査が立つてゐたし、近頃やうゝ京都に出來た無軌道電車なども走つてゐたし、新たに擴張されつゝあつた郊外の方には、コンクリートの自動車道に竝んで、馬の蹄を損ねないやうに柔かい土を盛つた馬車道までが作られてゐた。で、旅行から歸つて來た私は、日本を厭はしく思ふと共に、熱心な支那好きになり、更に熱心な西洋好きになつた。從つて、私の取り扱ふ題材は西洋を慕ふ心持ちのものが多く、私の生活樣式は、衣も、食も、住も、ひたすら西洋人の眞似をして、及ばざらんことを恐れるやうになつて行つたが、さう云ふ私に東京が面白い筈はない。その頃の東京には洋館の借家などはめつたになかつたし、たまにあつても貴族や高官の住むやうな大きな屋敷ばかりである。よんどころなく貧弱な西洋家具を買つて來て、日本間に飾つてみる。衣服は裁縫の上手な洋服屋を搜して、これも西洋の映畫で仕込まれた智識に依つてモーニングからタキシードまで一と通り揃へ、ネクタイの蒐集までして、先づ外見はハイカラな紳士が出來上るが、その恰好で何處へ押し出すと云ふアテもない。帝劇にバンドマンのオペラがかゝつたり、精養軒ホテルで結婚の披露があつたりする時の外は、タキシードを着る機會もなく、折角の服も持ち腐れになる始末であつたが、それでもモーニングや背廣を着込んで、ステッキを振り振り銀座や淺草をそゞろ歩く。さう云ふ時に私の腦裡には、カジノやキャバレやダンスホールなどが浮かぶのであるが、そんなものが此の都會にはないのだと思ふと、「あゝ、東京は詰らないなあ」と、常にも增して感ずるのである。私は上海のカルトンカフエーで夜會服を着た白人の男女が幾組も踊つ

てゐる花やかな光景を見て來たが、私が行つた時、そのカフエーに日本人のマネエヂャーがゐて「將來これを東京へ持つて行かうと思ふんですがね」と、語つたことがあつた。しかし私は、その計劃には大賛成だけれども、此の日本人は日本と云ふ國の事情を知らない、かう云ふものを東京へ持つて行つて警察が許す筈がないと思つたので「それはとても駄目でせうね」と答へておいたが、さう云ふ日本の國情を考へると、いよ〳〵淋しくなるのであつた。私は既に藝者と云ふものに反感をさへ持つてゐたので、どんなに異性の友達に憧れても、茶屋や待合には足が向かない。私の求めるものは、生き生きした眼と、快活な表情と明朗な音聲と、健康で均齊の取れた體格と、さうして何よりも、眞つ直ぐな長い脚と、ハイヒールの沓がぴつちり嵌まる爪先の尖つた可愛い足と、要するに、外國のスタアの肉體と服裝とを備へたやうな婦人

てあつた。私はそれに似たものを見るためにしばしば金龍館や日本館や觀音劇場のオペラへ行つた。そしてあの頃の原信子や、岡村文子や、まだ十四五の小娘であつた可憐な石井小浪孃の舞臺姿を眺めて、幾分か渇を癒やしてゐた。事實、大正八九年頃の日本ムスメたちは、女學生さへが海老茶の袴を穿いてゐたので、舞臺の上より外に洋裝の女を見ることは稀であつた。私の記憶に誤まりがなければ、鶴見の花月園に横濱の外人を當て込んだダンスホールが許されたのは、たしかに大正十一年頃で、彼處へぼつぽつ西洋婦人に見紛ふやうな服裝をした日本の女が來るやうになつたが、それも大概は横濱に住んで西洋人と附き合つてゐる人々であつた。その後東京にも新築の帝國ホテルなどに時時ダンスの催しがあり、二三の小さなホールも出來たが、何分世間一般が社交ダンスと云ふものを白眼視してゐた時代なので、

到底横濱のやうな譯には行かず、顏觸れも殆んど横濱の連中が押しかけて行くに過ぎなかつた。が、兎に角少しづつでもさう云ふ機運が向いて來たからには、やがて東京の空にも紐育にあるやうな摩天樓が聳え立ち、町を行く女は皆すつきりした洋裝をしてコンクリートの鋪道を沓の踵で憂々と歩み、あらゆる西洋の娯樂機關が輸入されて、カルトンカフエーのマネエヂヤーの夢みたことが實現するやうになるであらう。何事も西洋を模範とする日本である以上、必ずその時代が來ずにはゐない。私はさう思ふと、その想像で胸が高鳴るのであつたが、飜つて自分の年齡を考へ、現在のだらしのない東京市を見ると、此の雜然たる首府の面目が一新するのはいつの日であらうかと云ふ歎聲が湧き、その間に自分の青春の去つてしまふのが口惜しかつた。自分は東京生れだけれども、今の東京には何の未練もない。いつそ大



火事でもあつて、あの五味溜めを引つくり覆へしたやうな町々が烏有に歸してしまつたらいゝ。さうしたら遲々として捗らない改良工事が、一擧にして成就するだらう。私は明け暮れそんなことばかり考へてゐた。

○

ラフカディオ・ハーンは、人は悲しみの絶頂にある時に見たり聞いたりしたことを生涯忘れないものだと云つた。だが私は又、人はどんなに悲しい時でもそれと全く反對な嬉しいことや、明るいことや、滑稽なことを考へるものであるやうに感じる。なぜなら私は、かの大震災の折、自分が助かつたと思つた刹那横濱にある妻子の安否を氣遣つたけれども、殆んど同じ瞬間に「しめた、これで東京がよくなるぞ」と云ふ歡喜が湧いて來るのを、如何とも

し難かつたのである。私は前にも云ふやうに、火に包まれて逃げまどふ妻子の身の上を案じながら小涌谷まで歩いたのであつたが、しかしその間も、此の「しめた」と云ふ考へが一方に存在してゐて、時々それで頭の中が一杯になり、悲しい想像や心配を忘れさせてしまふ數分間、或ひは數秒間があつた。陰鬱な雲の間から急に日が洩れてあたりを明るくするやうに、その考へは私の前途に希望を投げ、私を勇躍抃舞させた。私は此の未曾有の瞬間に妻子と相抱いて燒け死ぬことが出來なかつたのを悔い、彼等を置いてひとり箱根に來てゐたことを、責め、怨み、憤つたけれども、「東京がよくなる」ことを考へると「助かつてよかつた、めつたには死なれぬ」と云ふ一念が直ぐその後から頭を擡げた。妻子のためには火の勢ひが少しても遲く弱いやうにと祈りながら、一方では又「燒けろ燒けろ、みんな燒けちまへ」と思つた。あの亂脈な東京。

泥濘と、惡道路と、不秩序と、險惡な人情の外何物もない東京。私はそれが今の恐ろしい震動で一とたまりもなく崩壞し、張りぼての洋風建築と附け木のやうな日本家屋の集團が痛快に燒けつつあるさまを想ふと、サバ〳〵して胸がすくのであつた。私の東京に對する反感はそれほど大きなものであつたが、てもその燒け野原に鬱然たる近代都市が勃興するであらうことには、何の疑ひも抱かなかつた。かゝる災厄に馴れてゐる日本人は、このくらゐなことでへタバル筈はない。サンフランシスコは十年を經て前より立派な都市になつたと聞いてゐるが、東京も十年後には大丈夫復興する。そして、その時こそはあの海上ビルや丸ビルのやうな巍然たる大建築で全部が埋まつてしまふのである。私は宏莊な大都市の景觀を想像し、それに伴ふ風俗習慣の變革に思ひ及んで、種々な幻影を空に描いた。并然たる街路と、ピカ〳〵

した新裝の鋪道と、自動車の洪水と、幾何學的な美觀を以て層々累々とそゝり立つブロックと、その間を縫ふ高架線、地下線、路面の電車と、一大不夜城の夜の賑はひと、巴里や紐育にあるやうな娯樂機關と。そして、その時こそは東京の市民は純歐米風の生活をするやうになり、男も女も、若い人たちは皆洋服を着るのである。それは必然の勢ひであつて、欲すると否とに拘はらずさうなる。爲政者達が我が國の淳風美俗を口にして西洋流の奢侈逸樂を禁じようとしても、舊式の劇場が亡び、寄席が亡び、花柳界が亡んでしまつた曉には、それに取つて代るものが出現せずにはゐない。さう考へた時、復興後の東京の諸斷面が映畫のフラッシュの如く幾つも幾つも眼前を掠めた。夜會服と燕尾服やタキシードとが入り交つてシャンペングラスの數々が海月のやうに浮游する宴會の場面、黑く光る街路に幾筋ものヘッドライトが錯綜する劇場前の夜更けの混雜、羅綾と繻子と脚線美と人工光線の氾濫してあるボードヴィルの舞臺、銀座や淺草や丸の内や日比谷公園の灯影に出沒するストリートウォーカーの媚笑、土耳古風呂、マッサーヂ、美容室等の祕密な悦樂、獵奇的な犯罪。いつたい私は、さうてなくてもいろ〳〵突飛な妄想を描いて白日の夢に耽る癖があるのだが、これらの幻が實に不思議にも、妻や娘の悲しい佛の間に交つて、執拗に纏綿するのであつた。而も私は平坦な路を無意識に歩いてゐたのではない。御承知の通り、彼處は左側が高い崖で右側が深い谷であり、その間を一本の山路がうねつてゐるのだが、路はその夏工事をしたばかりで、柔かい土がところどころ谷へ崩れ落ち、或る部分は木の根岩角に摑まらなければ、ずる〳〵と足の下が滑つて行つた。路が殘つてゐる所でも、あの箱根山の頂邊には大きな燒け石のやうな岩がごろ〳〵し

てゐたのが一度に振り落されたので、それらが場所を塞いでゐた。のみならず、いつ搖り返しが來るかも知れない危險もあつた。だから私は歩くと云ふことに可なり注意を集めなければならなかつた。さう云ふ最中に私の空想は家族の運命と未來の東京の花やかな繪卷とを交互に趁つてゐたのである。私の悲しみは大きかつたが、喜びもそれに釣り合つてゐた。東京の面目一新、あらゆる近代的蠱惑の坩堝の出現、恐らく自分の生きてゐるうちに際會することは出來ないであらうとあきらめてゐたものを、地震が持ち來たしてくれたのだ。四五十年を要する推移が、十年に縮められたのだ。自分の妄想は最早や空中樓閣ではなくなつた。私は、これから生れて來る者の幸福を思ひ、今年七八歳になる少女の十年先を考へては、期待に胸が躍るのであつた。もう彼女たちは疊の上に坐つたり、帶で胴體を締め付けたり、重い平べつ



たい木の穿き物を引き摺るやうなことはないであらう。そして彼女たちの肉體が健やかな發育を遂げた頃には、家庭に、街頭に、競技場に、海水浴場に、溫泉地に、舊時代の日本が夢想だもしなかつた女性美が見られるであらう。それは殆んど人種が違つてしまつたやうな變化であり、姿も、皮膚の色も、眼の色も、西洋人臭いものになり、彼女たちの話す日本語さへが歐洲語のひゞきを持つてもあらう。私は自分の歳を考へると、十年と云ふ歳月が待ち遠しかつた。十年たてば自分は四十八歳になる。あゝ、せめてもう十年若かつたら、今の喜びはもつともつと大きいであらうに。それを思へば一年でも早くさう云ふ時が來てくれるといゝ、願はくは四十五歳になる迄の間に。そして願はくは新東京の娘たちが自分を相手にしてくれる間に。私は斯く考へつゝ山路を下つて行つたのであつた。

東京をおもふ

○

小涌谷へ着くと、一と夏を一緒に暮らした顔馴染みの連中がホテルの前の遊園地に避難してゐたが、私は其處で悔恨の情を新たにさせられたのであつた。なぜかと云ふのに、そこに居合はせた人々は、日本人も外國人も、大概は家族連れで、私のやうに妻子と離れてゐる者はなかつた。彼等は互ひに、親子、夫婦、兄弟が手を執り合つて危難を逃れたことを喜び、かう云ふ際に一緒にゐることが出來た幸運を、心から感謝してゐる風であつたが、その光景は私に取つて何よりも辛い見物であつた。「奥さんやお嬢さんはどうなさいましたでせうねえ」と案じてくれる彼等の言葉の半面には、私の不幸に引き換へて自分たちはいゝことをしたと思ふ樣子が見え、なぜ此の人は妻子を置いて來たんだらうと非難するかの如くであつた。たゞ、今となつて私の願ふところは、震災の範圍と程度が少しでも小さく、横濱や東京が無事であつてくれゝばいゝと云ふ一事であつたが、ホテルのマネーヂャーのH君は、別な理由から出來るだけ災害の地域の大きいことを望んでゐた。尤もこれはH君ばかりではない。地元の人は皆さう望んだと云ふのは、從來箱根はしばしば火山性の地震があり、それが大袈裟に傳はつたゝめに客足が減じる傾向があつたので、もし斯くの如き大地震が箱根だけのものであつたら、此の土地の再起は覺束ないと云ふ憂ひを持つてゐたのである。そしてH君を始め土地の人々は、箱根の爲めには不幸だけれども東京や横濱までがこんな大地震に見舞はれたとは信じられない、どうしても此れは箱根だけの局部地震であらうと云つて、甚しく悲觀するのに反し、私は又、彼等の悲觀が當つてくれゝばいゝけれど

も、去年の暮れと、今年の春と、二回までも横濱に稀な强震のあつたことを考へ、かねがね聞いてゐた專門家の豫想を思ひ合せて、必ず關東一圓の大震であらうと斷定せずにはゐられなかつた。やがて、午後一時頃に宮の下が火災を起したらしく黄色い煙が天に冲するのが見え、夕刻、小田原の町の方角がぼうつと赤く染まつてゐるのを遙かな山の麓の空に望んだ時には、私はいよいよ自分の斷定が的中したと云ふ念を强めた。夜に入つてから人人は遊園地の芝生にテントを張つたが、眠られないまゝに再び地震の範圍について議論し合つた。土地の人は矢張り箱根地震說を唱へて、世界的に有名な此の溫泉地ももう駄目になるのではないかと云ふ悲觀論を繰り返す。それに對して、私は有るだけの地震學の智識を傾けて、そんなことは無用な心配だ、さつきの地震はそんな局部的なものでは有り得ない、箱根の災害などは



大都會のそれに比べればてんで問題ではないであらう、既に諸君は宮の下が燒けたのを見、小田原が燒けたのを見たではないか、此の遊園地からは小田原より先は見えないけれども、大磯も、平塚も、鎌倉も、そして、私には最も苦痛な想像であるが、私の妻子の住んでゐる横濱も、現に斯く語つてゐる此の時刻に、盛んに燃えつゝあるであらう、横濱にして然りとすれば、東京も安全な筈はない、いや恐らくは、東京こそ此の地震の中心であつて、あれから房總半島へかけての災害が一番激甚であらうと云つた。だが人々は私の所說があまり彼等の推定とかけ離れてゐるので、容易に首肯する者はなかつた。誰も彼も東京や横濱がさう云ふ慘狀を呈してゐようとは信じなかつたし、又信じたくないのであつた。私は彼等に、私の言を疑ふならば誰か此の後ろの山の頂邊へ登つて東の方を望んでみ給へ、必ず東京や横濱の燃えてゐる

のが見えるてあらう、普通の火事なら見えないかも知れないが、何十萬何百萬と云ふ人口を持つ大市街が燃えてゐるのである、東京灣の津々浦々が炎を揚げてゐるのである、さうだとすれば、天を焦がす偉きな火光が見えないと云つたが、進んて登つてみようと云ふ醉興者もゐなかつた。彼等は不安な微笑を浮べて眼を見合はせるばかりであつた。私は一人も自分の說を信じてくれないのが不平でもあつたし、よく考へれば、それは妻子の悲慘な最期を祈るやうなものでもあつたし、變に矛盾した心持ちでテントの蔭に身を横たへたが、夜が更けるにつれて私の腦裡には傷ましい幻影ばかりが浮かんだ。私は再び、夫を呼び父を呼ぶ細々とした聲を聞いて、ひとり枕を濡らしたが、さうするうちに靜かな雨が降り出したので、そのさめ〴〵とした雫の音が間もなく新たな哀愁を誘つた。もし此の雨が横濱にも降つてゐるとすれば、火の勢ひを幾らかでも殺いてくれるてあらう、とすると可憐な者共は燒死を免れたてあらうか、それとも此の雨は、何處かの路端にころがつてゐる妻や娘の亡き骸の上に、無殘に降りそゝいてゐるてあらうか。私は毛布にくるまりながらさう云ふ悲しい夢を抱いて一と夜を悶え通したのてあつた。

○

さて、それから十有一年の歲月が過ぎた。待ち遠に思つた震災後の十年は、去年(昭和八年)の九月一日を以て完了し、私は最早や四十九歲に達してゐる。だが、現在の私、さうして現在の東京は如何。此の世は一寸先が闇で、何事も豫期の通りには行かないと云ふが、私は嘗て小涌谷の山路を辿りながらさま〴〵な妄想に耽つた當時を追懷して、今日のやうな皮肉な結果を見たことを喜ん

ていゝか悲しんでいゝか、不思議な氣持ちがするのである。先づ何よりも、私があの時想像した震災の範圍、東京が蒙つた慘禍の程度、竝びにその復興の速度と樣式とは、半ばは的中し、半ばは的中しなかつたと云へる。私はあの時箱根の人々の短見を嗤つたのであつたが、私の推定も大袈裟過ぎてゐた。關東一圓の地震と云ふ觀測に誤まりはなかつたけれども、被害は東京府下よりも神奈川縣下の方がひどく、就中小田原鎌倉片瀨近傍が第一であつて、東京は横濱に比べると、犧牲が思ひの外少い。横濱にゐた私の一家眷屬でさへ一人殘らず助かつたのであるから、東京で死んだ人はよく〳〵運が惡いのである。被服廠や吉原の死傷は大變な數であるけれども、私は實はあの何倍かの慘事を考へ、全東京市が被服廠のやうになるであらうと豫想してゐた。然るに東京に於いては大概な家屋が倒壞を免れ、火が比較的長い時間にのろ〳〵と燃え擴がつたために、下町の住民も大部分は無事に逃げ延び、山の手の市街は殆んど舊態を保つことが出來た。從つて東京市の復興は、十年の間に見事成し遂げられたとは云へ、私が思つたやうな根本的な變革とまでは行かなかつた。私は當時の後藤(新平)内相が三十億の資金を以て一旦燒け野原を政府に買ひ上げ、規矩整然たる新市街を建設すると云ふ大規模な案を聞いた時、心私かに快哉を叫んだ一人であつたが、その後内相の案は實行されずにしまつたので、舊東京の不規則な街路の佛はなほ充分に跡を絶つたとは云ひにくい。成る程、隅田川を始め諸所の河川には輕快な弧線を描いた大小無數の橋梁が懸つた。丸の内から、銀座、京橋、日本橋に至る界隈は、文字通り面目を一新した。されば私は、汽車で品川から新橋を過ぎ、中央ステーションへ這入る時、沿道の景觀を俯瞰して、これが幼年の頃しば〳〵半日

を遊び暮らした淋しい草原のあつた所かと、常に訝しみ驚くのである。外國から歸つて來た人々は、今の東京の立派さは、おさおさ歐米の一流の都市に劣らないと云ふ。いかにも、若き日の私が西洋のフイルムを見て夢想した市街も、これほど莊麗なものではなかつた。いや〳〵、大正十二年の九月一日、あの山路を歩いてゐた私に妻子の不幸をさへ忘れさせた白日の幻も、此の眼前の輪煥の美には及ぶべくもない。が、さう云ふ外觀上の變化は、市民の嗜好や、風俗や、習慣や、言語や、動作に、どれほどの影響を齎したと云ふのか。正直のところ、これも私の想像があまり先走りし過ぎてゐたので、彼等は私があの時豫測したやうには歐米化してゐないのである。近頃ステッキガールと云ふやうなものが巷に現はれ、カフエーやバアの繁昌は花柳界を壓倒し、映畫やレヴユウの流行は歌舞伎の客を奪ひつゝあるとは云ふものゝ、キヤバレやカジノは愚かなこと、上海のカルトンカフエーに匹敵するものさへ猶存在を許されてはゐず、ダンスホールは昔のやうに兎角の非難を招いてゐる。そして銀座通りを歩けば、堂々たる大ビルディングの間に伍して大阪式の甘いもの屋が行人の食慾をそゝり、市民は今も灘の生一本に醉ひを求め、鮨の立ち喰ひや小皿物に舌皷を打ち、支那料理や西洋料理が歡迎される一方に、日本料理の盛んなことも往時を凌ぐものがあつて、未だに彼等の殆んど全部が米の飯を常食とし、刺身や豆腐や澤庵や味噌汁を食つてゐるのである。女子の洋裝が殖えたとは云ふものゝ、女學生や女車掌の制服と女中たちのアッパッパを除いたら、洋服らしい洋服を着た夫人や令孃たちの數は、果たして何割あるであらうか。夏は幾らか多いけれども、冬の街頭や百貨店内を見渡したら、十人に一人もゐないかも知れない。オフイスガールまて

が、半數は和服を着てゐると見ていゝ。まことに東京の近代化、もしくは西洋化は、女子の服裝と一般の食味に於いて最も遲れてゐるやうに思へる。

○

蓋し東京の市民生活の西洋化が、震災と云ふ絶好の機會を得たにも拘はらず、十年前に私が期待したやうな過激な進展を示すことがなく、今もなほ遲々たる歩みをつゞけてゐるのには、いろいろの理由があるのであらう。たとへば災害の範圍が大體下町に限られて山の手の方がなまじ其の儘に殘つたために、新東京の建設にも多少の手心が加はつたてあらうし、引いてはそれが市民に二重生活を餘儀なくせしめてもゐるのであらう。が、實はさう云ふ物質的な事情よりも、より深い所に重大な原因がある

のかも知れない。よし東京市が寸土を餘さず燒けてしまひ、完全に新たな市街がその跡に打ち建てられたとしても、苟くも二千數百年の傳統を持つ國民の氣質や習慣は、なか〳〵そのくらゐな外的條件では亡びないのかも知れない。私はさつき、東京の市民は未だに米の飯を食つてゐると書いたが、これは「未だに」ではなく、ひよつとすると「永久に」なのであらう。今日米價の調節が政治上の樞要な問題として扱はれてゐるのを見ても、東京市民、從つて日本國民が、パンを常食とするやうな時代が遲い將來に實現されようとは思ひも及ばない。十年前の私がさう云ふ無茶な豫想をしたのは何とも滑稽千萬てあるが、しかし若い時分には誰しも「西洋」に魅惑されて、斯かる改革が容易に行はれ得るやうに考へるのてある。昔、ほんたうかどうか分らないが、文部大臣の森有禮氏は日本語や日本文字を廢して國民に英語をしやべら

せ、英文字を學ばせようと云ふ案を立てたが、却つて外人の識者にそのことの行はれ難い所以を敎へられて、悟るところがあつたと云ふ。當時の森文相は何歳であつたか知らぬが、あゝ云ふ有爲な政治家にして尙且そんな謬想を抱くのだとすると、日本の青年が一度は私と同じやうな夢を描くのも尤もである。つい四五年前、左傾思想が横行した頃には日本の國家や社會組織の變動が數年内に起らなければならぬものゝやうに考へ、それを必至の勢ひであると思ひ込んで居た青年が、いかに多かつたことであらうか。私は元來政治の方には關心を持つてゐないので、衣食住の樣式、女性美の標準、娛樂機關の發達等のことばかりしか考へてゐなかつたのであるが、それにしても現在の東京を見て如何の感があるかと云ふのに、十年前の私としては幻滅の苦杯を喫した譯であるが、豈圖らんや、東京以上に自分自身が變化したのを發見してそゞろに浩歎するのである。永井先生の「つゆのあとさき」にある松崎と云ふ法學博士は、尾張町の四つ辻に彳んで銀座街頭の夜景を眺めながら、

松崎は法學博士の學位を持ち、もと木挽町邊に在つた某省の高等官吏であつたが、……麹町の屋敷から抱車で通勤した其の當時、毎日目にした銀座通りと、震災後も日々に變つて行く今日の光景とを比較すると、唯夢のやうだと云ふより外はない。夢のやうだといふのは、今日の羅馬人が羅馬の古都を思ふやうな深刻な心持をいふのではない。寄席の見物人が手品師の技術を見るのと同じやうな輕い贊稱の意を寓するに過ぎない。西洋文明を模倣した都市の光景もこゝに至れば驚異の極、何となく一種の悲哀を催さしめる。

と云ふやうな感慨を洩らし、又その先の方て、

君江は同じ賣笑婦でも從來の藝娼妓とは全く性質を異にしたもので、西洋の都會に蔓延してゐる私娼と同型のものである。あゝ云ふ女が東京の市街に現れて來たのも、之を要するに時代の空氣からだと思へば時勢の變遷ほど驚くべきものはない。

と云つてゐて、此の一節があの物語中で最も强く私の心を打つのであるが、私は「驚異の極」である西洋文明の模倣を目擊して、格別の喜びを感じるのでもなければ、その模倣の度が足りないことを不滿に思つてゐるのでもない。ありていに云ふと、まあ此の程度に止まつてよかつたと云ふやうな、期待が裏切られたことに却つて幾らかの慰めを感じ、斯く感ずる現在の自分を省みて、松崎博士と同じやうな悲哀にとざされるのである。まことに世間のことは何一つとして意の如くにならないものだが、分けても自分自身のことほど測り難いものはない。十年後の東京を見透し得たと信じた私は、その見透しに於いて誤まつてゐたのみならず、明日の我が身がどう變るかも知れないことを、勘定に入れなかつたのである。今日、こんな風に變り果てた帝都の有樣を見て、喜んでいゝか悲しんでいゝか迷つてゐる私。東京が西洋化した頃には、いつか自分が西洋嫌ひになつてゐる私。そして未來の東京に望みを抱くよりは、幼年時代の東京をなつかしむ私。あゝ、人間萬事塞翁が馬とは斯くの如きことを云ふのであらうか。

○

尤もあの當時、私は十年後を考へて既に早く遲暮の感を催したことは事實だけれども、それは自分の肉體の衰へを憂へたのであつて、心境までがかう云ふ風に變るであらうとは思つてゐな

かつたのである。だが、斯く心境の變つたことも、やはり肉體の衰へが齎した結果で、他に原因はないのであらうか。自分自身のことを語る資格のない私は、それについても自分では判斷の下しやうがない。たゞ震災後、ほんの一時の避難のつもりで關西へ逃げて來たことが、私を今日あらしめた第一歩であつたやうに思はれる。では何故に關西へ走つたかと云ふのに、私は大正十年の春、大正活映の「蛇性の婬」のロケーションで久方ぶりに京都や大和地方を訪れてから、上方が好きになつてゐたのであつた。これは西洋かぶれのしてゐた當時としては一寸矛盾のやうだけれども、自分は外人が廣重の繪を珍重するやうな意味で、舊き日本をエキゾティズムとして愛するのだと、さうまあ自分では解釋してゐた。それと云ふのが、その頃の私は山手の外人街に住み、アマの部屋以外には疊の部屋が一つもない家屋に起居して、西洋料理のコックを置き、朝夕靴を脱いだことのない生活をしてゐたので、外人の遊覽客と同じやうな氣分を以て奈良や京都に遊ぶことが出來た。私にはそれが愉快であつた。のみならず、私は明治の末年以來長らく關西の土を踏んだことがなかつたが、十年振りて行つてみると、北京や南京や江蘇浙江あたりにある古い東洋のよいところが、日本の舊都附近にも殘つてゐることを知つたのである。私はそれらの土地や風俗に同化したいとは思はなかつたが、それらを一幅の繪として眺める時、少くとも亂雜な東京より遙かに魅力のあるものとして愛着を持つた。で、まあ最初は、新しき東京が出來上るのを待つ間、腰かけのつもりで阪神の沿線に居を構へ、古風な京都とハイカラな神戸とに生活の變化を求めながら暮らして行かうとしたのであつたが、あの當座は私以外にも隨分多くの罹災民が流れ込んで來たものであつ

た。私の最も親しい人ては第一に小山内君がゐた。氏は大阪の谷町にあつたプラトン社の顧問をしてをられたので、地震の少し前から六甲苦樂園に別莊を借りてをられたが、地震を機會に東京を引き拂つて大阪の天王寺に移られ、今の直木君や川口松太郎君と共に「女性」の編輯に從事してをられた。映畫關係ではキネマ旬報社が、今ては西の宮の市内に這入つたが、當時はまだ淋しかつた夙川の土手の松並木の下にあつたので、田中三郎、田村幸彦、鈴木俊夫の諸君がそこを梁山伯にしてをられ、古川綠波君などもとき〳〵東京から賑やかしに來られた。その外、横濱て顔馴染の外人は殆んど全部神戸へ移つて來たと云つてもよく、ダンス友達の此方へわざ〳〵踊りにやつて來る者も少くなかつた。さう云へばあの頃の阪神間に於ける罹災民氣分も、今となつてはなつかしい思ひ出の一つてある。花月園やグランドホテルの恰好な踊り場を失つた我等は、たゞもう踊りたいためにても神戸の近所に住まんことを欲し、震災の年のクリスマスやニューイヤースイーヴには早くもファンシーボールの興を盡したのてある。燒け出された我等は、日本人も西洋人も、見知らぬ土地て最初の新年を迎ふべく相擁して踊りながら、ありし日の横濱の繁榮を語り、再び復るすべもないあの港ての樂しい生活に懷舊の情を寄せたのてあつた。あのリッチ事件て問題を起したF孃なども當時は神戸に見えてゐたが、あゝ云ふ顔觸れが如何に震災前の横濱の記憶を我等に强く呼び起したことか。いつたいあの頃、關西ては神戸のホテルに折々催しがあるだけて、大阪のカテーヂやカフエーユニオンや、京都京極のカフエーローヤルなどは至つて殺風景なものだつたので、我等罹災民は寄ると觸ると横濱の昔を戀ひしがり、花月園やグランドやオリエンタルの

豪華を偲んだものであつた。が、さう云ふ罹災民時代もほんの二三年だつたであらうか。震災地の燒け跡にぽつぽつバラックが建つやうになると、我等の仲間は一人減り二人減りして次第に關東へ引き揚げてしまつた。小山内君などは眞つ先に歸つて、土方與志君と築地小劇場を起した。横濱から來た外人てさへが、神戸の外人とはどうも反りが合はぬと云つて戻つて行つた。それだのに私だけは、とうとう此方に居着いてしまつたのである。それはその後も引き續いて頻々と起る關東の地震が、地震嫌ひの私を一層臆病にしたせゐてもあり、時々樣子を見に行つても復興の事業の捗らないのに業を煮やしたからてもあり、それより も何よりも、關西の地そのものが、と云ふのは、神戸ではなく、大阪や京都や奈良の古い日本が、知らぬ間に私を征服してしまつた故てあるが、さう云ふ私の內部に於ける變遷を語るのは此の稿



の目的以外てあるから、一應の順序としてこれだけを述べるに止めよう。兎に角私は、大正十五年の正月、二度目の上海見物から歸つて來て以後二三年の間に、だん〳〵洋風生活に「おさらば」を告げるやうになつたのてある。

○

さう云ふ次第て、私は現在ては自分を東京人てあるとは思つてゐない。中年に及んて移住したので、全く關西に同化しきれようとは信じられないが、ても出來るだけ同化したいと願つてゐることは事實てあつて、東京には何の未練もない。考へてみると、過ぎ來し四十九年のうち、東京に住んてゐたのが約三十五年、湘南地方や横濱に轉々と居を移したのが約三四年、それから地震て阪神の蘆屋に逃げて來てからが十一二年、とすると、今のところ

では東京在住の期間が一番長かつた譯だけれども、關西生活の十一二年も私の過去の生涯に於いて最早や相當の分量を占めてゐる。且や自分の熟知してゐた東京の下町は悉く灰燼に歸してしまひ、町の條理さへも變つてしまつた今日となつては、そこが自分の生れた土地であつたと云ふ以外に、何の因緣も感じられない。自分が七歳から十二三歳の頃まで暮らした南茅場町の家の跡などは、千代田橋から永代へ通ふ大道の眞ん中になつてゐると云ふ有樣、親戚故舊など多くは散り散りに、そして大概は微祿して場末の方へ引つ込んでしまつたり、朝鮮の果てへまで流れて行つたりする始末で、もう東京の日本橋區と云ふ所は自分の故郷ではなくなつてゐる。それでも私は、此方へ來てから二三年の間は折々上京する毎に「歸つて來た」と云ふ氣がしたけれども、いつからともなくその關係が逆になつて、一週間も東京にゐると早々に上方へ「歸り」たくなり、汽車で逢阪山のトンネルを越え、山崎あたりを通り過ぎるとホッと息をつくのである。そんな譯だから、私は復興後の東京に對しては一個のエトランゼエであつて、何事も語る資格はない。たとへば自動車に乘つて街を走るとして、ふと窓外に眼を轉じた時、大阪や京都なら「今どの邊を走つてゐる」と云ふ感覺があるけれども、近來の東京では見當のつかない場合が多い。昔なら乘物の中で急にぱつと眼を開いても、此處は赤坂らしいとか神田らしいとか、一見して直覺出來たものだが、今では東京の町の匂ひが分らなくなり、時に依つては方角さへも見失ふ。現に去年の秋、辰野隆君と夕方の五時に星ヶ岡茶寮で遇ふ約束をして、四時半まで上野の院展を見物し、山下からタクシーを走らせたのはいゝが、その運轉手が星ヶ岡を知らない。麹町の山王樣と云つても日枝神社と云つても矢張り

知らない。私はそれは知つてゐるが、そこへ行くまでの近道が分らない。そんなことで大分遲刻をしてしまつたが、土地に對するさう云ふ感覺を失つたことは、自分が最早やその土地での只の旅人に過ぎないと云ふ何よりの證據である。いつたい道を覺えるのには、徒歩か、電車でても往復しなければ中々呑み込めないものなのに、たまに出て來ては三四日自動車を乘り廻して直ぐ又歸つてしまふのであるから、物覺えが惡くなつてゐる老年の私には、もう永久に東京の町筋を覺え込む機會はないであらう。而も私は、さう云ふたまの上京に際しても古い友達を訪ねることなどは殆んどない。打ち明けて云ふと、懇意な雜誌社との取引上の用務か、據ん所ない關係の祝儀不祝儀に出席するため、毎年二三回は出て來るけれども、用が濟めばいつもコソコソと、何處へも顏を出さないやうにして逃げるやうに引き揚げる。自分の上京中のことが新聞の消息欄に出て、方々から電話がかゝつて來ても、大概は體よく斷つてしまひ、出發の時間なども秘し隱しにして、誰にも見付からずに下りの夜汽車に乘り込んでから、まあよかつたと始めて安心するのである。

○

然らば震災後の東京の何處がそんなに厭なのかと云はれると、實は自分でもその心持ちをはつきり探り當てるのに一寸困難を覺えるのである。それは自分が西洋厭ひになつたがために、今の歐米化した街衢が氣に入らないと云ふのでもない。兎にも角にも復興後の帝都の壯麗さには私と雖も時に讃嘆の情を禁じ得ないものがあるが、さう云ふ新しい方面よりも、寧ろその新しいものゝ中に殘存してゐる舊い東京の俤、たとへば市民の顏つ

きだとか、話振りだとか、物腰恰好だとか、食ひ物だとか、着物だとか、一と口に云へば、東京人の趣味とか氣風とか云ふものが、どうも昨今の私には溜らなく鼻につくのである。多分東京に住んでゐる中流階級以上の男女は日本人中で自分達が一番氣の利いた人種のやうに己惚れてゐることであらうが、正直のところ、どうも私にはあゝ云ふ連中が何となく薄ッぺらで、氣障で、纖弱で、何處かに淋しい影が纏はつてゐるやうに思はれてならない。尤も斯くいふ私自身も、生れは爭はれないものであるから、關西人の眼から見たら定めし御他聞に洩れないであらう。それで東京に住んでゐた頃は、他人のことにも自分のことにも一向氣が付かなかつたのであるが、此方へ來てから遙かに東京の生活を想ひ、又はとき〴〵上京してみると、それが切實に分るやうな氣がする。私はさう云ふ東京人の臭味を一概に嫌ふと云ふのではない。何と云つても自分の兩親や伯父伯母や竹馬の友の間などに共通した特長であるから、そこには云ふに云はれない懷しみもあるのだけれども、それだけに又それがたまらなく不愉快でもある。思ふにこれは東京人にも大阪人にも容易に理解されない氣持ち、私のやうに生れ故郷の東京を見捨てゝ而も尙東京と緣を切ることが出來ずにゐる者のみが知る感情であらうが、私はこれを如何に說明してよいか表現の言葉に迷ふのである。が、まあ例を擧げて云ふと、數年前、或る時辻潤がぶらりと岡本へやつて來て、鮒の雀燒を土產にくれたことがある。辻はその時「君、これは千住の鮒の雀燒だぜ、此方にゐるとめつたに食へやしないだらう」と、さう云ひながらその雀燒の小さな折を私の前に出したのであつた。いつても何の前觸れもなしに飛び込んで來る風來坊の辻潤が手土產を提げて來たのさへ珍しいのに、あのなつか

しい千住名物の雀燒と聞いては、私も何がなしに少年時代が想ひ出されて「あゝ、それは有り難いね」と心の底から喜んで云つた。關西の人は雀燒と云つたつて恐らく知らないに違ひない。鮒の身を開いて、甘辛い下地をつけて燒いて串に刺した、佃煮のやうに眞つ黑な色をしたもので、その恰好がふくら雀のやうな圓い形をしてゐるところから雀燒とても云ふのであらうか、さう特別においしい物でも何でもないが、てもそれを名物にしてゐた家が千住と兩國邊にあつたので、震災後の現在もさう云ふ店が殘つてゐることが分つてみると、それが珍味であると云ふ以外に、いろ〳〵とそれに關聯した思ひ出が湧くのである。昔の江戸つ兒、分けても下町のお店者などは、長火鉢の前にすわりながらこんな物を肴にして一杯やつたものであるが、私の父なども實にその一人であつて、圖らずも今黑いカサ〳〵したその鮒の色を眺めると、ありし日の兩親の姿や、私の十台頃の我が家の食膳の光景がまざ〳〵と浮かんで來るのであつた。全く私は、東京にこんな食ひ物があつたことを長い間忘れてゐた。それにしてもまあ雀燒とはよくも思ひついたものだけれども、それがまた辻と云ふ人柄にいかにもしつくり嵌まつてゐるので、なるほど辻が土産にしさうなものだわいと、改めて感心したのであつた。と云つたゞけでは分るまいが、それは見るから佗びしい、ヒネクレた、哀れな食ひ物なのである。今の大東京市と云ふものと此の鮒の雀燒とはどう考へても兩立しようとは思はれない程、貧弱な、情ない「名物」なのである。事のついでに私はさま〳〵な東京の食ひ物、關東の方が本場となつてゐる名物について考へてみたが、先づ想ひ出されたのは淺草海苔である。それから鹽鮭、鹽鱈、鹽煎餅、納豆、佃煮、タヽミイワシ、クサヤの乾物等々である。これらの中

には事實は東京產てないものもあらう。たとへば海苔などは東京灣で採れるものは年々少くなり、大部分は和歌の浦や伊勢灣から集められて、再び淺草海苔と云ふ名前の下に此方へ逆輸入されるのだと聞いてゐる。それに東京名物と云つても、近頃は關西で得られないものは殆んどない。上に列擧した品目のうちて、納豆は私が此方へ來てからポツ〳〵見かけるやうになり、今もほんたうに得なれないのは鹽鱈とタヽミイワシだけてあらう。關西の人は鱈と云へば干鱈かぼう鱈のことゝ心得て、鹽鱈のあることを知らない。タヽミイワシに至つては絕對に見られない。だが、これらの食ひ物を見渡したところ、うまいまづいは別として、なんと不思議に寒氣のするやうな、あぢきない物が多いことよ。私の友人の偕樂園主人はタヽミイワシと鮫の煮つけが大好きて、あれさへあれば外のお數はいらないと云ふのだが、あの麩の糊に似たタヽミイワシを考へると、私は悲しくなるのてある。もちろんあれを芳しく燒いて、上等の醬油をふりかけた風味は惡くはない。しかしそれにしても、あの薄つぺらな、名も知れぬ雜魚を寄せ集めたやうなものをバリ〳〵と嚙んて飯を掻つ込むと云ふのは、何としても佗びしい。食べる當人は滿足ても、はたから見ると決して景氣のいゝものてはなく、いかにも詰まらないものをお數にしてゐるやうに見える。て、此のタヽミイワシと雀燒にある一脈の淋しさ、それを私は東京人の生活の有らゆる方面に感じるのてある。

○

食ひ物の話になつたついてに、その方の例を引くのが早分りだと思ふから、尙もう少し云はせて貰はう。元來オツなものと云は

れるやうな、ヒネクレた名物は東京に限つたことてはない。京や大阪にだつて、調べたら隨分變つたものがあることてあらう。だが一般に魚肉や野菜や鷄肉や牛肉が豐富て美味な上方にあつては、あゝてもないかうてもないが昂じた結果さう云ふものを摘まむのてある。鯛の刺身やグジの鹽燒に飽き飽きした者が、酢莖て茶粥を搔つ込んだりコノコて一杯やると云ふなら分つてゐる。ところが東京ては正式の料理に使ふ材料に何一つとしてうまいものがなく、仕方がなしにさう云ふ變なヒネクレたものを漁るのてある。前に擧げた鮫の煮つけなどにしても、上方の人に聞いてみると、あんな物は此方ては商店のお番菜にも使はぬと云ふ。私は子供の時分によくあれを食はされた覺えがあるが、あの切り身を東京流の黑い醬油て煮て皿の上へ載せたところは、ちやうど丸太を輪切りにしたやうに年輪に似た筋があつて、

何のことはない、木て拵へた土瓶敷があるだらう、まあ色合ひも形もとんとあれにそつくりなのだ。そして骨もない代りには味もソツ氣もないものなのだ。それから鹽飛魚、鯖の味噌煮、私は十六七から二十歳頃まて書生奉公をした時代にあゝ云ふものを毎日お惣菜に食はされた經驗があり、今思ひ出すと懷しいけれども、味はうまくも何ともない。蠟を嚙むが如しとは全くあんなのを云ふのてあらう。ては生魚て何がうまいかと云へば、先づ秋刀魚に、小鰭に、鰯に、シコと云つたやうな、ほんの僅かな下魚の類てある。菓子にしてもその通りて、東京の人は今戸や草加の鹽煎餅を自慢にするが、上等な干菓子や生菓子があつての上なら兎も角も、羊羹一つ碌なものがなくて、鹽煎餅が名物とはあんまり野蠻てはないか。尤もモナカや田舍饅頭にはいくらかうまいものがあるが、孰れにしても粗野て、貧弱て、殺風景なものばかりて

ある。煎餅にしたつて、今戸や草加と云ふ所は東京の場末や在方であるから、元來田舍の名物なのだ。東京人はさう云ふ變に佗しいものを「一寸オツだ」と云つて賞美するのだが、そして昔の江戸ッ兒は知らず、今の彼等は決してそれを負け惜しみのつもりで云つてゐるのではないのだが、私は實はそのオツと云ふ言葉を聞くと、一種のうすら寒い身ぶるひを感じ、その蔭に隱されてゐる東京人の薄ッぺらさを考へて何とも云へず悲しくなる。

○

繰り返して云ふが、私はさう云ふ東京の名物に反感と愛着との矛盾した感情を抱いてゐるので、遠く離れてゐるときは、馬鹿貝の附け燒が戀ひしくなつたり柱の山葵醬油が無上にたべてみたくなつたりする。さうして今度東京へ行つたら存分にたべて來ようと思ふのであるが、生憎季節外れであつたり、小料理屋を覗く暇がなかつたりして、いつも機會を逸してしまふ。何しろたべたい物と云ふのが、料理屋よりも小人數な家庭の小鍋立に適したやうなものばかりであるから、遠慮のいらない友達の家にでも泊まつて主人夫婦と同じ長火鉢の前にすわり、同じ食卓を圍むのでなければ、中々望みが叶ひにくい。然るに去年の十一月末から十二月の下旬へかけ、私は雜誌社の仕事その他の用務を帶びて暫く滯京する必要が起り、前後二十五六日の間、鶴見の上山草人の宅に客となつた。震災後、私がこんなにも長く東京附近に留まつてゐたことは今度が始めてゞあつて、原稿を書く都合上、靜かな草人の家の新築の二階を借りたのであつたが、日頃の私の食ひしん坊を呑み込んでゐる草人は、その長い滯在の期間中頗る氣の利いたもてなしをしてくれたのである。草人は第一

に私に何が食ひたいかと云つた。私は鮟鱇鍋と答へた。次ぎには東北の納豆だと云つた。それから仙臺の辛味噌のオミオツケ、カンモのスヂ、馬鹿、柱、シャコ等を所望した。すると草人の曰くに、それらは孰れも拙者自身の好物て、日夕我が家の食膳を缺かしたことのない物ばかりてある、鮟鱇は幸ひ向島の學校へ通ふ倅があるので、歸りに魚河岸へ廻らせて、毎日のやうに買はせてゐる、納豆は水戸の驛前から取り寄せて常に何十本となく貯へ、毎朝必ず食ふことにしてゐる、味噌は仙臺から送らせてゐたが、近頃此の近所に佐渡の味噌を賣る店があり、試してみると仙臺味噌と同じなので、昨今はそれを用ゐてゐるが、必ずお氣に召すことと思ふ、カンモのスヂも倅に買つて來て貰ふ、馬鹿や柱やシャコに至つては、此處は名にし負ふ東京灣を前に控へた昔の深川のやうな町だ、餘りふんだんにあり過ぎて我が家の者は食傷してゐる程だけれども、御所望とあらば幾らでも差上げる、その外蟹でも章魚でも赤貝でも蛤でも淺蜊でも蜆でも、江戸つ兒の食ふ物なら何でもある、と云ふのてある。蓋し主客が食物について共通の嗜好を有する時ほど、双方に幸福なことはない。私は全く久し振りてさう云ふ江戸前の食物を心行くかぎり賞美した。而も二十年來の舊友と膝をつき合はせてそれらのものを突ッついてゐると、思ひがけない連想が次ぎ次ぎに浮かんて來るのてあつた。今私の眼の前に、どてらを着て、朝鮮の骨董屋から漁つて來たと云ふ詩の文句の彫つてあるチャブ臺に向つて、スヾコや烏賊の鹽辛をセヽりながら五勺入りの燗徳利て朝酒をたしなんてゐる草人の恰好は、私の親父などの樣子によく似てゐる。親父もよくかう云ふ風にほんのちよつぴり朝酒を飲んだ。そして草人がしてゐるやうにオミオツケの上へ中辛（ちゅうから）の七色唐辛を振り

かけて啜つた。納豆も水戸から取り寄せるやうな面倒はしなかつたが、その時分毎朝市中を賣り歩くのを買つてたべた。草人が一二合の酒に陶然として「古への新羅の國の博士等が星を指しけん石凝かな」などと自作の和歌や俳句を吟咏するやうに、私の親父も直に醉つ拂つて好い心持ちさうに都々逸や義太夫のサワリを呻つた。但し草人は五十の坂を越えた今日も尙往年の氣魄を藏し、精悍な東北男兒の面目を存してゐるので、敗殘の江つ兒に過ぎなかつた私の親父と比較するのは氣の毒だけれども、さう云ふ風なチャブ臺の光景を前にしてどてらにくるまつてゐる姿を見ると、どうしても一個の好々爺である。これが嘗ては明治末期の新劇壇に風雲を捲き起し、又或る時は衣川孔雀との艶名を謳はれ、後には北米に雄飛して世界的の映畫俳優となり、ダグラスやジョンバリモーアと共演しコンラドファイトを蹴

落したりした男とは、思へないのである。さう云へば彼が十年振りて横濱の埠頭に上陸し、ニューグランドホテルの一室に落ち着いて、歡迎の友人達に日本で何が食ひたいかと聞かれた時、やつぱり私と同じやうに「鮟鱇鍋」と答へたものだつた。恐らく彼は十年の滯米期間中、毎年冬が來る毎に鮟鱇の味を想ひつゞけてゐたのであらう。それでも歸つて來た當座、今後の日本人は疊の上の生活を廢すべしなどと云つてゐたが、間もなく鶴見の山の下にさゝやかな家を買ひ、それを建て增したり改築したりして斜楓莊と名付けてゐる今の草庵には、疊てない部屋は一と間もない。竹の柱に茅の屋根ではないけれども、門の扉を船板にしてこれも朝鮮で仕入れた一對の聯を懸け、居間には爐を切つて床の間や棚にアテ丸太を使ふなど、とんと小料理屋か小待合の感じである。さうしてそこに、小さく畏まつて坐つて、丸々と着ぶく

れて、自ら下地の加減をし、獨活の切り方がいゝの悪いのと云ひながら鮟鱇の骨を口から手摑みて引き拔いてゐる樣子の、いかに似つかはしいことよ。だが又、これがあの時のモンゴールの王子かと思へば、いかにその姿の佗びしくもあることよ。なぜかと云つて、御馳走になりながらそんなことを云つては濟まないけれども、さま〳〵の珍味が並べられてゐる膳の上の色どりが、久保田君の口眞似をすればさう云つても妙にうすら寒くつて悲しいのである。元來江戸の「オッな食ひ物」と云ふものが、獨逸語てフレッセンと云ふペチャペチャ音をさせてたべる動物の食ひ方、あれて食はなければうまくないものが多い。私の知つてゐる英吉利人の奥さんの日本婦人て、茶漬けを音をさせないて食ふ人があるが、あれては當人も旨くなからうし、見てゐる方てもまづ〳〵しい。いつたい日本の食ひ物にはさう云ふものが多いやうだが、東京には殊に澤山ある。第一に蕎麥がさうだ。鹽煎餅、タヽミイワシ、澤庵、海苔もさうだ。いや、シャコや蟹になると、音をさせるどころか、手を使はなければ追つ付かない。上方ても鯛の頭や蟹の身をむしるには手を使ふのが早道だけれども、東京ほど野蠻な眞似をしないても濟む。蟹なども、此方のは北國から來る大きい蟹だから始末がいゝが、東京の蟹は小さいので、手が餘計よごれる。就中東京だけの特產てあるシャコと來ては、全く箸を捨てゝかゝり、兩手を使ふ必要があるので、手がビショビショに下地て濡れる。それを一々ふきんやハンケチて拭いてゐたのては面倒てあるから、チュッチュッと指の腹を舐めずつてはたべる。剝きジャコは乙てないと云つて殼の着いたのを煮て食ふのだが、騷ぎの大きい割りにたべられるところは甚だ少い。胃の腑に這入る分量より屍骸の方が嵩張るので、あの百足に似た恰好の

殼が見る〳〵膳の上に山を築く。それが、季節が冬であるから、キタナラシイ上にぢゝむさくて寒さうに見える實際に又、たべながら指の先が冷めたくなる。で、江戸つ兒が鼻をすゝりながら醬油に滲みた兩方の手を舐め舐めたべる光景は、當人が旨がつてゐればゐる程、何だかさもしくて哀れを誘ふ。私の親父なんかは始終そんな物ばかり食ひつけてゐたせゐか、何をたべてもチユツチユツと舌を鳴らす癖があつたが、草人がやつぱり、舌は鳴らさないけれども、カクン、カクンと、上顎と下顎とを打ちつけてたべる。口の中で、ちやうど獅子舞の獅子が口を閉ぢるやうな音を聞かせる。私は關西にゐて長い間戀ひこがれてゐたものを、今度と云ふ今度はウンザリするほど食はされて、さてどんな感想を持つたかと云へば、實に上に述べたやうな堪らなく淋しい、あぢきない氣分である。あゝ、自分がこがれてゐた江戸つ兒の食ひ物はあれだつたのか、四十年前、我が兩親の家の長火鉢の前に竝んでゐたものはあれだつたのかと、私は歸りの汽車の中でそゞろに身ぶるひしたのであつた。

○

ところで、此の東京人の衣食住に纏はる變な淋しさは何處から來るのかと思つてみるのに、結局それは、東北人の影響ではないのか。私はそれについて青森の男が話したことを思ひ出すのだが、東京の人は仙臺と云ふ所を東北の玄關のやうに考へてゐるけれども、青森からみると、彼處は東京の玄關としか考へられないと云ふのである。なるほど、東京と青森の間では仙臺の位置がさう云ふ風になるであらうが、もし青森と京都の間、或は下關の間では如何。東京の人は政治の中心に住んでゐるから、そこを地

理的にも人文的にも日本の中心だと考へ易いが、しかしたまたま關西から出かけてみると、何となく東京が東北の玄關のやうに見え、此處から東北が始まるのだと云ふ感が深い。さうして事實、京阪地方に四國や中國の人間が多いやうに、東京には近い所て栃木、茨城、あれからずつと、會津、米澤、仙臺、南部、青森、秋田、あの邊の人間が非常に多い。草人なども仙臺から出て來て名を成した一人てあるが、震災後は純粹の江戸つ兒が次第に何處かへ影を潛めて、東北人の入り込む數がます〳〵殖えて行くらしい。その證據には、昔に比べて東北訛の東京辯が非常に多くなつたのに氣がつく。恐らく自動車の運轉手などは東北人が大部分てあらう。運轉手と云へば、いつぞや小石川の目白坂を流してゐるのを拾つて乘つたのが、此奴が一寸モダーン味のあるイナセな兄哥(あにい)て、芥場町まて乘せて行く途々、落語家のやうな垢拔けた口調ていろ〳〵と運轉手稼業の辛いことを瓢輕に語り出すのてあつたが、だん〳〵尋ねると、色物の寄席が大好きてとき〳〵聽きに行くと云ふ。だが此の兄哥のしやべる言葉が、よく聞いてゐるとやつぱり何處かに野州邊のあの尻上りのアクセントがあるのだ。いかさま、現代の東京のイキとかイナセとか云ふ奴は皆これなんだとつく〳〵その時も思つたことだが、運轉手はいゝとして待合の女將なんかにズウ〳〵が多いのには全く驚く。それも澁谷や五反田てはない、新橋赤坂下谷と云ふやうな所に案外それがあるのてある。私は經濟上のことはよく知らないが、自分に最も緣の近い出版業者の話を聞くと、雜誌ても單行本ても關東よりは關西の方が遙かに多く賣れる、京都から西には大阪があり、廣島があり、福岡があり、朝鮮滿洲の殖民地があつて、孰れも相當の讀者層を有してゐるが、關東の方は、たゞ東京が全國的に第

一位を占め斷然群を拔いてゐる外には、仙臺や札幌などは大したことはないと云ふ。此の一事を以て推論すると、東北と云ふ所は東京と云ふ恐ろしく立派な玄關を持つてゐるだけで、いや、或は玄關にばかり費用をかけ過ぎたために、西部日本に比べると財力も文化も劣つてゐるのだ。さうして東京はその貧しい東北のたつた一つの大都會なのだ。斯く東京を「東北地方に屬するもの」として見る時、昔は「鳥が啼く東（あづま）」と云つた夷が住んでゐた荒蕪の土地が權現樣の御入府に依つて政治的に、と云ふのはつまり人爲的に、繁華な町にさせられたものであると見る時、始めて今戸の煎餅や千住の鮒の雀燒や淺草海苔やタヽミイワシが名物であると云ふ理由が分る。震災前の東京市は市でなくて村だと云はれたが、震災後の今も、或る意味に於いて田舍なのだ。米澤や會津や秋田や仙臺の延長なのだ。私は嘗て東北に遊んで、モヤシのヌタや、鰕（はたはた）の味噌漬や、ナメコの三杯酢に舌鼓を打つたことがあり、今でも折々たべてみたくなるけれども、あの地酒のまづさを想ひ、それらの食物の東北らしい淋しい色合ひを想ふと、背筋が寒くなつて來て、再び彼の地へ行つてみようと云ふ氣にはなれない。が、東京の所謂「オツなもの」を竝べた食膳の色彩も、それと幾ばくの差があるかと云ひたい。

○

私は、歷史のことはよく知らないが、今の東京、昔の江戸と云ふものゝ成り立ちを考へると、昨今の滿洲國の新都新京のやうなものであつたらうと想像する。何しろ土地は廣いけれども、見渡す限り草ぼう〳〵たる原ッぱで、大阪や京都に負けないやうな新市街を建設することは容易でない。折角道路を作つても、地質が

柔かて、泥濘が深く、雨が降れば溝どろになり、冬になれば霜解けがする。そこへ持つて來て秩父颪の空ッ風がビユウビユウ吹く。日本は氣候溫暖だとか風光明媚とか云はれるのは、瀨戸內海の沿岸、大阪から四國中國へかけての話て、箱根から東は四季を通じて曇天が多く、横なぐりの風雨が强く、全體に土の色が黑ずんてゐて、山の形や樹木の姿が荒々しく、海岸の景色も、高砂住の江須磨明石などの白沙青松と云ふ譯には行かない。おまけにときどき地震がある。二百十日前後には毎年凄じい颱風が來る。土着の人はいゝけれども、政府の命令てさう云ふ土地へ西國から移つて來て、俄普請の家の中に住まはなければならなかつた大名や豪商共の家族は、どんなにか心細かつたてあらう。今ても地方の素封家などが、故郷て失敗して東京へ流れて來、中野や澁谷や阿佐ヶ谷あたりのガタピシした新建ちの借家に世帶を持つて



ゐるのを見ると、とても氣の毒になると云ふのは、凡そ東京の場末の新開地ぐらゐ索落たる感じのする所はないのてある。これは私の持說てあるが、あの邊の冬は恐らく北海道の冬よりも寒からう。北國は溫度が低くてもそれを凌ぎ得るやうな設備があり、雪が積れば却つて家の中は暖いものだし、雪國らしい情趣も生ずる。然るに東京の場末と來ては、雪が積らないて、空ッ風が吹き募る。同じ借家ても京阪地方のは疊建具が親切に出來てゐて、座敷も京間だからユトリがあり、床や柱の材木などもしつかりしてゐるが、東京のは概して貧弱て建てつけが惡いから、隙間洩る風の寒いことゝ云つたらない。夜は敷布團を何枚重ねても、疊の合せ目からさへ寒い空氣が這ひ上つて、スウ〳〵と襟元へ沁みる。それに、町の光景を何よりも哀れに醜くしてゐるものは、あの外圍ひの蔀(しとみ)てある。上方の借家は、外側が壁か、てなければ杉の

燒板を縱に張つてあるので、まだ見られるが、東京の蔀と云ふ奴は立派な家のでも薄汚い。まして安普請になると、あれがカラカラに乾いて、干割れたり膨れ上つたりしてゐて、見るからに掘立小屋のやうである。廣い空の下に、さう云ふ矮屋が兩側に竝んで、往來の地面はカン〳〵に凍てゝゐる。そこを木枯しがビユウビユウと紙屑や砂塵を吹き飛ばして通る。夕方、訪ねる知人の家が分らないで、そんな家竝みの間をウロ〳〵する時、路上で子供が鼻をすゝりながら遊んでゐたりするのを見ると、實に悲しい。何の因果で此の人達はこんな所へやつて來るのだらう。東京々々と云ふが、農村でも田舍の小都會でも、こんな町よりはまだ落ち着きがあるではないか。彼等の故郷の家屋敷の方が、煤けてゐても寒暑を凌ぐには足りるであらうし、爐邊の居心地も惡くはあるまいに、こんな場末の生活の何處がよくつてと思ひ、彼等もそれは分つてゐながら生きて行くために是非なく東京へ集まるのだとすれば、それは政治が惡いのだと云ふ風にも思ふ。が、德川氏の初期に於ける江戸の下町も、多分、あんな風なカサ〳〵した、みじめなものだつたに違ひない。そして關西から移住した上方人は、武士も町人も秩父颪や筑波颪に齒を喰ひしばり、魚や野菜のまづいのに苦い顏をしたことであらう。吉原の廓言葉が山出し女の訛りを胡麻化すためであつたことを思へば、遊女なども京大阪のそれに比べて肌觸りが粗く、立居振舞もふつつかで、熱河や新京のカフエー女の感じがしたであらうから、たま〳〵憂さを晴らしに行つても、うたゝ望鄕の念に驅られたであらう。春は花見、秋は紅葉と云ふけれども、嵐山や嵯峨や高尾や栂尾を知つてゐる者には、雜木林と草ッ原と平凡な丘陵の連續の外に、心を慰める眺めもない。私なんぞが小學校時代に秋の遠足と云ふ

と瀧の川へ出かけたものだが、あんなちつぽけな庭みたいな所が紅葉の名所だつたんだから驚く。その外には目黒の不動、堀切の菖蒲、木下川、臥龍梅の梅、柴又の帝釋天、龜井戸の藤、團子坂の菊、池上、堀の内のお祖師様、そんなのが四季の行樂の地であるとは、まあ情ないてはないか。大阪の人が成田の不動様々々と云ふから山深き靈域にある大した伽藍なんだらうと思つて、成田驛て下車してドン〳〵行くと、田圃や畑ばつかりて一向それらしいものがない、あゝさう云へばさつき通り路に山門らしいものがあつたが、扨はあれだつたのかしら、まさかあんな詰まらない所てはと、半信半疑て引つ返してみるとやつぱりそれがさうだつたと云ふ話があるが、名勝ても神社佛閣ても、關東と關西ては奈良の大佛と上野の大佛ほど違ふ。上野と云へば、京の清水寺に模した清水堂と云ふものが今も山内に殘つてゐるが、あれを京都の人に見せたら何と云ふだらう。龜井戸の天神様の太鼓橋と大阪の住吉神社のそれを比べてみても分る。泉岳寺なんかも「何だ、これが泉岳寺か」と呆れる人が多いさうだが、あの子供欺しのやうな義士の木像なども赤穗の華岳寺にあるものゝ方がずつと立派てあると云ふ。て、すべてがそんな工合に貧弱なのを見るにつけても、昔の江戸人が何とかして江戸を將軍家のお膝元らしくしようと、急に慌てゝいろ〳〵なものを取り揃へた様が想像される。だから江戸のものは、東叡山が比叡山の、愛宕山が愛宕山の眞似てあるやうに、皆間に合せて規模が小さい。

○

が、草創時代の江戸は、關ヶ原て勝ちを制した覇者の都てあるから、殺伐な中にも活氣が溢れてゐたてあらう。さうしてそこへ流

れ込んで來た江州商人や伊勢商人や三河武士共も、滿洲の新天地を望んで自己の運命を開拓しに行く昨今の人々の如く、雄心勃々たるものがあつたてあらう。されば彼等と東北人との混血兒てある昔の江戸つ兒が、タヽミイワシや目刺しのやうなものて我慢しながら、イキだとかオッだとか負け惜しみを云つてゐた氣分は分る。イキと云ふ言葉は「意氣」の意味なのてあらうが、彼等はあらゆる生活上の不便を、意氣を以て耐へ、征服したのだ。鯛がまづければ鮪や鰹の刺身を拵へ、蒲鉾が食へなければカンモのスヂのやうなものを作り、饂飩を蕎麥に換へ、白味噌を赤味噌にして、さう云ふ器量の惡い、田舍臭いものを、無理にイキだのオッだのと云つて喜んて食つたのだ。火事をさへ江戸の花と云つて痛快がつた彼等は、一面に於いて京阪の文化を取り入れるのに忙しかつたが、一面ては征服者の誇りを以て贅六を輕蔑した。

上方見物に來た江戸つ兒が堺の妙國寺の蘇鐵を見て「何だ蘇鐵か、蘇鐵ならちつとも珍しいこたあねえ、己あ山葵（わさび）かと思つた」と云つたと云ふ、それに似たやうな江戸の落語が幾種類かあつて、先年も菊五郎が芝居てやつたが、さう云ふ話の中にある江戸人の自慢を聞いてみても、實質的には何一つ京阪に優つたものがあるのてはない、今の蘇鐵の件なんぞは御愛嬌だが、あんな工合に威勢のいゝ口調てポン〳〵云つて除け、如才のない上方人を遣り込めた氣てゐるのてある。まことに物は見やうてあつて、シヤコや目刺しを並べたゞけの貧弱な食膳ても、食ふ人間の氣位次第て勇ましくも哀れにも見える。昔の江戸つ兒のイキと云ひオッと云ふ言葉の中には確かにさう云ふ氣概が籠つてゐたのてあらうが、それは政治的に關東が關西を壓服してゐた時代迄のことて、私などが知つてゐる江戸趣味と云ふもの、さうして今

の東京にも變な形で殘つてゐるそれは、そんな景氣のいゝものてはない。幕末から明治の初期、中期、末期へかけての江戸つ兒乃至江戸趣味は、昔の氣概がない癖にその缺點ばかりを受け繼いだ、ヒネクレた、亡國的な、イヤ味なものてある。私は日本橋の蠣殼町二丁目の、今もある筈の玉秀と云ふ鳥屋の近所、かき餅屋の隣りて生れたんだが、自分の兩親や祖母は勿論、家に出入りしてゐた親戚や知人の誰彼を見渡しても、落語にあるやうな向う意氣の強い江戸つ兒は一人もゐなかつた。思ふにそれにはいろ〳〵の原因があるてあらう。江戸にも追ひ〳〵固有の文化が形成され、草創時代のやうな殖民地氣分てなくなつた代りには、化政度の爛熟期を經て次第に世紀末的に、廢頽的になり、旗本の次男が劍術は下手だが三味線や端唄は上手と云ふやうな世相を現出した。そこへ維新の變動が起り、三百年の太平に馴れて遊惰安逸を貪つてゐた江戸人は、政治的、經濟的、軍事的に、上方に破れて關ヶ原の仇を取られた。されば維新後の東北は兎角繼兒扱ひを受け、さま〳〵の施設が關西より後れてゐるが、東京人と雖も氣分に於いては東北人と同じ敗者てあるから、意氣が揚がらないのも尤もてある。ちやうど甘やかされて育つた大家のお坊つちやんがジリ〳〵と身代を傾けて落魄したやうに、彼等は概して見え坊の癖に意志が弱い。常識の圓滿と趣味の纖細を自負してゐるが、はにかみ屋て、人の前ては口が利けない。洒落は巧いが世渡りは拙く、正直てはあるが勇氣や執着力がない。五月の鯉の吹き流しとか宵越しの錢は持たねえとか云つても、殖民地時代にはさう云ふ闊達さも必要だつたてあらうが、昔の江戸つ兒の意氣地がなくなつては、それは寧ろ救ふべからざる缺點てある。だから維新以後の社會に處しても、東京人は日に〳〵敗北者の位置

に追はれて零落の一路を辿りつゝある。最早や今日に於いては長閥だとか薩閥だとか云ふものがある譯ではなく、關ヶ原の恨みも鳥羽伏見會津の恨みも帳消しにされ、總べての日本人が立身の機會を均等に與へられてゐるのだが、東京の下町の人間て偉い政治家や實業家や軍人になつた者を殆んど聞かない。荒木前陸相や鳩山元文相は東京生れださうてあるが、彼等が純粹の東京人てあるとしたら誠に稀有の出世てあつて、私共のやうな下町の人間て、あゝ云ふ花々しい働きをしてゐる者は一人もない。本所生れの芥川龍之介は「われ〳〵は氣が弱いから駄目てすな」と、よくさう云つた「里見君は横濱生れだと云ふが、あれは薩摩人の血を受けてゐるから、とても强氣てす、あなたや僕のやうなものぢやありません」と、世間からは强氣らしく思はれてゐる私の弱氣を、流石に彼は觀破してゐた。

○

嘗て私は「私の見た大阪及び大阪人」の中て、東京の下町には「敗殘の江戸つ兒」と云ふ型が多いことを書いた。「私の父親などもその典型的な一人てあつたが、正直て、潔癖て、億劫がり屋て、名利に淡く、人みしりが强く、お世辭を云ふことが大嫌ひて(中略)商賣などをしても、他國者の押しの强いのとはとても太刀打ちすることが出來ない。そんな工合て親讓りの財産も擦つてしまひ、老境に及んては孫子や親類の厄介になるより外はないが、當人はそれを少しも苦にしない。(中略)五十錢か一圓も小遣ひをやればそれを持つて淺草あたりへテクつて行つて、活動を見るとか、鮓の立ち食ひをするとかして、半日を愉快に過す。酒も好きだが多くを嗜まず、一合の晩酌に陶然として、醉へば機嫌よく世間話をし、直

きにすや〳〵と寢てしまふ。ハタから見ると何を樂しみに生きてゐるのか分らないと云ひたいが、當人は天成の樂天家であるから、決して世を拗ねたり他人の幸福を嫉んだりしない。自分は勿論、骨肉の者の死に遇つても騷がず嘆かず、何事も定命として あきらめる。その代り親類間の爭ひとか、一家内の不和とかに關係することをうるさがり、自分だけはいつも超然として誰とても調和する。從つて子供たちにも親類にも邪魔にされず、又他人の迷惑になるやうな無心も云はず、ほんの僅かなあてがひ扶持て喜んで暮らしてゐる」と云ふ、さう云ふ老人がよく區役所や小學校の小使をしてゐたり、町内の碁會所などへ來てゐるものだが、いつぞやの中央公論に佐野繁次郎君が書いてゐた「船場」の話を讀むと、大阪にはあゝ云ふ型が少いと云ふから、矢張りあれは東京人の特質であらう。私は「さう云ふ老人が東京の古い家なら、



一家一門の間に必ず一人ぐらゐはゐるものだ」と書いた。「近いところでは辻潤などもまあそのタイプだ」とも云つた。この頃大阪に來て音樂の教師か何かをしてゐる澤田柳吉君なんぞも、敗殘と云つては失禮であるが、先づその方の部類であらう。が、よく考へると、一家一門に一人どころではない、こんな老人は實に多いのだ。澤田君や辻などはまだ脂ッ氣があるけれども、あれがもう少し年を取つて枯れて來ると、飄々として風のやうな、全く市井の仙人のやうな容貌になる。その顏つきは、今を時めく大臣や實業家などのそれとは正反對の感じて、第一皮膚の色つやが違ふ。どうも私の經驗では、さう云ふ老人に禿げ頭の人をあまり見かけない。おびんずる樣のやうにてら〳〵光つた、精力的な、蛸入道のやうな爺さんはめつたにゐない。體もコチ〳〵に干涸らびてゐるが、顏も面長に痩せてゐて、大概胡麻鹽の髮を五分刈りぐら

ゐにしてゐる。カサ〳〵した肌につやと云ふものが微塵もなくて、さも榮養不良らしい血色をし、皺の多いのが目立つ。さうして、眼の光が柔和で、初對面の人に會ふ時、オド〳〵した、はにかむやうな樣子合がある。物を云はせると、さわやかな江戸辯であるが、決して早口には語らず、又おしやべりでもなく、必要な時だけ、低い、優しい聲で、ゆつくりと云ふ。それが賴りないくらゐ粘り氣のない、さらりとした聲音(こわね)である。それでゐて氣の向いた折には家人を摑まへて洒落なども云ふ。私の親父が貧窮時代に(と云ふと、貧窮でない時代もあつたやうだが、後半生はずつと貧乏のし通してあつた。)五六歳になる末の弟を他家へ養子にやらうとしたことがあつたが、その弟が陰囊何とか云ふ睾丸の垂れ下る病氣になつた、すると或る朝、親父は母と差し向ひに長火鉢の上に屆みながら、「いゝぢやあねえか、それがほんとの持參睾丸(きん)だわな」と、ニコリともせずに、憂鬱な口調で云ふのである。私は傍で聞いてゐて可笑しくもあれば哀れでもあつたが、今考へると、親父が貧乏したのは、何よりも氣魄がないと云ふことゝ、無精であることが原因だつたと思ふ。親父はづう〳〵しいことや臆面もないことを甚しく嫌つた。そしてそんな人間を「彼奴は田舍者だ」と云つた。だから一とたび失敗するとすつかりアキラメを附けてしまつて、惡足掻きをしたつて仕方がないと云ふやうな變に悟り濟ました氣になり、獅子奮迅の勢て盛り返さうと云ふ料簡が湧かない。そんならと云つて、地道(ちみち)にコツ〳〵商賣にいそしむと云ふのでもない。日曜になると、長火鉢の前て一杯引つかけて、その儘ごろッと横になつて寢てばかりゐた。「ちよいと、お父(とつ)つあん、風邪を引きますよ、そんな所に寢てしまつてさあ」と、母が叱言を云ひながらそうッと搔卷(かいまき)をかけてやる。少年時代の私は、さう云ふ光

景を幾度も見た。やゝ成長してからはそれを苦々しいと感じた。寢る暇があつたら、少しは義理を缺いてゐる方面へ顔出しをしたらばどうか。親父のやうな働きのない人間でも、正直の一德を買はれて、隨分力になつてくれてゐた人もある、さうでなくても、私に學費を給してくれたり、家庭教師の口を世話してくれた人人がある、ところが親父はさう云ふ方面へさつぱり挨拶に廻つてくれない「近頃お父さんはどうしてゐるね、暫くお目に懸らないが」などと皮肉を云はれたこともあつたが、親父はいつも「濟まねえ濟まねえ」を繰り返して「誰さんの所へも一遍顔出しをしなくッちやあならねえんだが」と歌には唄ふけれども、それてゐて、いざとなるとつい億劫になつてしまふ。何もオベッカを云ひに行けの、お世辭を使つて取り入れのと云ふのではない、當然の禮儀を盡す迄のことなんだが、親父に云はせると「どうもあんまり厄介になり過ぎて、キマリが悪くつて行けやしねえ」とか「いろいろ親切に云つて下さるんで、有りがてえとは思ふけれども、自分の意氣地のねえことがつくづくイヤになつちまつて」とか云ふのである。だから恩に着てゐない譯ではないんだが、それだけに行きにくゝなつて足が遠のき、ますます闊が高くなり、我から世間を狹くしてしまふ。何とも云ひやうのない腑甲斐なさだが、會つてみると毒にも藥にもならない人間で、決して憎む氣にはなれない。現に親父なんぞは若い時から一遍も吉原を知らないと云ふ堅人で、何の樂しみがあるのでもなく、只もう無精なのであつた。で、東京人の悉くが斯うであるとは云へないけれども、その大部分が、年を取るとかう云つた老人になる。されば京都や大阪では土着の人間が今も尙先祖の資産を守り、大資本主義の時勢に抗して舊家の體面を保つてゐるのがザラにあるが、東京の下

町には、恐らくそんなのは數へる程しか殘つてゐまい。彼等は大概親の身代をなくして、それでも生れた町の近所の裏店なんかに巣食つてゐたものだが、その頽勢に地震が拍車をかけたので、散り〳〵バラ〳〵に郊外の方へ追ひ立てられ、行くへも知れずになつてしまつた。本所深川淺草あたりには、復興後の現在もコマ〳〵した家が割りに多いやうだから、まだ幾分か昔の住民が留まつてゐさうな氣がするが、一番ひどいのは日本橋ッ兒の運命である。彼等の家の跡は、京橋銀座丸の内の勢力範圍に入れられて磊嵬たる大ビルディングのブロックに塡められ、最早や彼等の住むやうな小さな路次の存在を許さない。私は船場や島の内あたりを歩いて、小ぢんまりした格子作りのしまうた家だの、昔風な土藏作りの老舗の前を通つたりすると、昔の日本橋の町の様子や小學校時代の友達の家などを思ひ浮かべるのである

が、さう云ふ友達て元の所に住んてゐるのは、偕樂園を除いたら一軒もない。蠣殼町を中心にして茅場町、堀江町、杉の森など、五六町の半徑内にかたまつてゐた私の本家や分家等も、私の所謂「北海道よりも寒い」場末の方へ移つて行き、或は朝鮮、ブラジルへまて流れて行つて、伯父伯母などが亡くなつた後は音信も不通になり、行方不明になつたのもある。かく考へて來れば、日本橋ッ兒は實に散々な目に遇つてゐる譯て、あの昭和通りや市場通りの眞ん中に立つて巍然たる街路を四顧すると、方丈記の著者ならずとも人生の無常を感ずるのてある。

○

思ふに眞の東京人てあるならば、上に述べた私の觀察が決して偏見ても誇張てもないことを認めてくれるてあらう。私は好ん

て故郷の人をクサスのではない。が、東京人は從來地方の人が考へてゐたやうな威勢のいゝ、ブリ、アントな人種ではない。彼等には何處までも東北人の暗い陰翳が附き纏つてゐ、彼等の頓智や洒落にさへも一脈の淋しさがたゞよふのである。それを疑ふ者は久保田万太郎氏の戯曲を讀むがいゝ。氏の作品を貫いてゐるあのじめ〳〵した陰鬱な氣分、あれこそ實に僞りのない東京人の世界であつて、苟くも下町の生活を知つてゐる者には、氏の描寫するさま〳〵な人物の顏つきや物云ひなどが一種異樣な現實味を持つて迫つて來るのを覺えるであらう。氏は好んでお店者や、職人や、お羽打ち枯らした藝人や、若旦那のなれの果てなどを扱ふやうだが、東京の下町の住民なる者は大部分がさう云ふ種族であつて、私などもあれを讀むと、自分の親しい人々の中に一々それらに當て嵌まるタイプを求めることが出來、彼等の聲音や風采はおろか、一と間の樣子、疊、座布團、襖の色、押入れ、火鉢、茶簞笥のありどころ、果てはその火鉢の抽出しや茶簞笥の中にどんな物がしまつてあるかと云ふことまで、はつきりと推測出來るのである。此の意味に於いて久保田氏の戯曲は、現代の東京が持つ唯一の郷土文學であり、また滅び行く東京人の弔鐘であるとも云へる。實際、氏の描くやうな純下町の世界は、今では東京の何處に殘つてゐるのであらう。事に依ると「たけくらべ」や「隅田川」の昔をあこがれる氏の藝術家的空想が生んだ產物であつて、もうそんなものは何處にも存在しないのではないかと、私はしばしば疑ふのである。氏の戯曲では、出て來る人物の悉くが洗練された、山の手臭の微塵もない、生粹の下町辯を使ふが、現代ではもう俳優とか落語家とか云ふ餘程特殊の社會でなかつたら、あ云ふ場合はめつたに有り得ない。十人寄れば必ずそのうちの

一人か二人は東北訛りが交つたり、山の手言葉や書生言葉が這入つたりする。こゝに下町辯と云ふのは、私の親父などの時代の下町の町人が使つた言葉、即ち氏の戯曲に見るやうな云ひ廻しを指すのであるが、私なんぞが親戚故舊の何回忌とか云ふやうな時に上京して、日本橋時代の古い顔馴染が寄り集まつた席へ出ると、たまにさう云ふ久保田式會話の情景に打つかる。そしてそんな老人たちに對すると、自分もいつしか釣り込まれて長らく使ふ機會のなかつたあのなつかしい云ひ廻しして受け答へをし、一寸いゝ氣持ちになるのであるが、それにしてもまあ此の人たちは、こんなに東京が變り果てゝしまふまでよくも無事でゐたものだ、いつたい今の東京のどんな隅ッこに生きでゐたのかと、不思議な氣持ちがするのである。彼等の歳を聞いてみると、みんな五十幾つとか六十幾つとか云ふ。「只今お住居は」と云ふと、代木の方とか、杉並の方とか、果ては馬込だの碑文ヶ谷だのと、昔は聞いたこともなかつた町や村の名を云つて、あとは曖昧に口籠りながらキマリ悪るさうに横を向く。此の人たちが誰も彼も決して裕福に暮らしてゐるのでないことは、住居の様子を聞くまでもなく身なりをみればそれと察しがつくのであつて、羊羹色の紋附の羽織にヤマの這入つた仙臺平の袴なんかを穿いてゐるのはまだいゝ方だが、中には明治年代のフロックコートを着、雨の日だとゴムの長靴でやつて來たりする。私は久し振りて亡き兩親が親しくしてゐた此れらの人たちに遇ふのであるが、やはり嬉しいよりは悲しい方が胸を打つ。彼等と雖も昔はもう少しその眼光に輝やきがあり、言語に張りがあり、表情に活氣があつた筈だが、何とその下町辯の徒らに鮮やかにして、その人體（にんてい）のいかに影が薄く、みすぼらしくなつたことよ。分けても斯う云

ふ人たちの身にそぐはない洋服姿は、何よりも心を傷ましめる。彼等は窮屈なズボンや上衣は着てゐるけれども、煙草を吸ふ手つきや、ヒョイヒョイと首を下げて挨拶する恰好や、兩の膝頭を擦り寄せて畏まる樣子などに、爭はれない體のこなしが出て、どうしても角帶に前掛けを締めてゐた下町の町人そのまゝである。だが考へてみれば、霜の降る朝遠い郊外から赤土の解けた道を踏んで、バスや省線や市電を乘り次いで來る今の彼等には、ぞべらぞべらした紋附袴よりも洋服やゴム靴の方が便利である に違ひない。彼等はもう服裝なんかに構つてゐる暇はないのだ。彼等の持つてゐた東京人の誇りなんと云ふものは、世路の辛酸と鬪ふ間に消磨し盡されて、昔の日本橋の町が跡形もなく滅びたやうに、完全に忘れ去られてゐるのだ。さうなつて來ると、今も彼等が使つてゐる爽やかな下町辯といふものが、寧ろ哀愁を催さしめる。いつそ東北のズウ〳〵辯か朝鮮訛りの日本語でも使つてゐてくれたらば、こんなに情なくは見えまいにと思ふ。いかに故郷忘じ難しとて、私はかう云ふ人々と會ひ、かう云ふ悲しい思ひをするのが辛いのである。久保田氏の戲曲の世界は、戲曲なればこそ感興を覺えるが、實際にあゝ云ふ雰圍氣の中へ這入つてみようとは、さらさら願はないのである。

○

私は餘りに舊時代の東京人について語り過ぎたかも知れない。久保田氏の戲曲か落語家の話にのみ出て來る東京人、さう云ふものは、たとひ彼等が眞の江戸人の子孫であり、江戸の傳統を受け繼いだ純粹の種族であるとしても、さうして又、私には最も緣故の深い連中であるとは云ふものゝ、或は既に滅びてしまひ、或

は滅びつゝある人々であつて、現在の大東京を代表する市民でも何でもない。さうかと云つて、今の帝都を代表するのはどう云ふ階級の人々であらうか、私にはつきり見當が付かないのであるが、震災後特に感じることは、所謂智識階級に屬する男女が著しく殖えたやうな氣がする一事である。尤も東京と云ふ所は昔からさうなのであるから、近頃頓にさう感じるのは私が田舍者になつたせゐかも知れない。が、いつたい山の手の住民は以前から下町の町人に對して、官吏や、軍人や、政治家や、讀書人が多かつた。そして彼等の住宅區域は大部分震災を免れたので、燒け殘つた彼等が自然東京を代表するやうになり、それが今日の智識階級と云ふものに進化したのではあるまいか。「進化」と云ふのは、今日の彼等は以前の山の手の人々とも違ふ。以前の人々は、服裝、言葉づかひ、坐作進退等、いろ〳〵の點で明かに下町の市民と對照をなし、趣味や肌觸りが異つてゐたが、今日の智識階級は震災前の下町山の手兩樣の趣味を包容し、尙その上に上方贅六の料理をも歡迎し、近代藝術の敎養に富み、西歐の繪畫や音樂をさへ理解する。實に彼等の鑑賞力は出鱈目と云つてもいゝ程に廣い。彼等の趣味を比率て現はすと、山の手五分、下町三分、田舍二分と云ふところではあるまいか。その昔漱石先生は「猫」の中で「月並」なるものに定義を下して、白木屋の番頭に中學生を加へて二で割つたものだと云つたが、今日の東京にはそれよりもう少し複雜な要素の月並臭を持つた通人が、非常に多い。但し複雜と云つたところで、決して內面的な複雜ではなく、極めて上ッ面な、ほんの鼻先だけのもので、お腹の中の單純なことは白木屋の番頭ブラス中學生時代と變りはない。彼等は昨日はAワンで飯を喰つて文樂座の出開帳に押し寄せ、今日は帝劇のキングコングを見て

歸りに濱作て一杯やる。朝にファッショ政治を論じ、ヒットラーや荒木さんの噂をするかと思へば、夕にはフリードマンを評し、菊五郎を說く。而も一と通り聞いてゐると、中々分つたらしいことを云ふ。隨分政界の消息にも通じ、新聞に出ないやうなことまでも聞き嚙つてゐ、又樂屋裏の事情にも明るく、水谷八重子は誰がパトロンだとか、六代目には幾ら幾らの借金があるとか、見て來たやうなことを云ふ。文化學院の生徒あたりから四十五十の有閑紳士やマダム連までが大概此の程度の通人であり、インテリゲンチアであるのだから恐れ入る。さうしてロケだのデモだのセンチだの合流だの轉向だのと云ふ言葉が、忽ち一般人の常用語になり、常識になる。私はかう云ふ市民に會ふと、なるほど日本人も利口になり生意氣になつたものだと思ふ。全く、此の調子では舶來品であれ國產品であれ、あらゆる贅澤品が東京に於い



て多大の顧客を見出すと云ふのも無理はない。九里四郎君が今のBRを數寄屋橋際で始める前に、出來るなら關西で開業しようと思つて、大阪と東京と、兩方の西洋料理屋を視察してみたが、大阪では開く餘地がないことを悟つて東京へ持つて行つた。九里君の話に依ると、洋食屋へ這入る客種と云ふのが、此の兩都ではまるで違ふ、大阪では高級な洋食を食ふお客さんは極く少數に限られてゐて、そんな人たちにはまあアラスカが一軒あれば澤山である、あとの連中は、洋食と云へばハイカラで、輕便で、格安なものと極めてゐるので、いくら旨くても安くなかつたら食ひに行かない、だから經營次第で儲けることは出來るけれども、料理人が腕を振つて認めて貰ふと云ふ樂しみがない、そこへ行くと東京は、彼處が旨いと云ふことになれば値段などにはお構ひなしに食道樂が寄つて來る、故に贅澤な「うまいもの屋」が後から

後から出來るのだと云ふ。バアなどにしても、大阪では女給の綺麗首を揃へてカタテルかウイスキーても飲まして置くより能はないが、東京では華族や外交官の通がゐるので、歐洲物の古酒の味を解してくれ、かう云ふものをどう云ふ經路て手に入れたかなどと褒めてくれるのが嬉しいと云ふ。半襟なども大阪ては たか〳〵十圓臺が止まりてあるが、東京には二十圓三十圓と云ふのが珍しくない。從つて東京人は氣前がよく、金離れがいゝ。旅行に行つても茶代なんかを派手に氣張る。宵越しの錢は持たないと云ふ習慣を、今の東京の智識階級が矢張り受け繼いてゐるのてある。いや、そればかりてなく、彼等は前代の下町人の弱點を總べて受け繼いてゐる、たとへば變に氣の弱いところも、一沫の東北的淋しさの漂つてゐるところも。

○

元來此の連中たち、今の東京の智識階級なるものは、職業的に見てどう云ふ人々が多いのてあらうか。前にも云ふやうに、彼等の中には學生もゐる、有閑紳士や婦人もゐる、銀行會社の重役もゐる、官吏や代議士の古手もゐる、だが此の外に昔は下町人の方に屬してゐたところの、銀座京橋日本橋邊の商店の主人、俳優、藝人、畫家、小說家等も交つてゐる。斯く見來れば紛然雜然とした集團てあつて職業的には統一がないのてあるが、それてゐて彼等の面貌、言語、動作等には或る共通したものが存在する。昔は俳優ても新派の人と舊派の人とは身嗜みが異なり、藝者と貴婦人とは一見して區別が付き、官吏と町人とは頭の下げ方一つても見分けられたが、今はだん〳〵外見上の差別がなくなり、映畫のスタ

ーも華族の令孃も清元の師匠も金持ちの若旦那もホテルのマネージャーも外交官も、皆インテリゲンチアと云ふ一階級に屬せんとしてゐる。何しろ久保田の万ちやんが洋服を着て放送局の何々課長とかに納まり、菊五郎がニッカー姿で鳩山文部大臣にゴルフを敎はる御時勢である。思ふにかう云ふ狀態を誘致したのには、ジャーナリズムの力が大いに與つてゐるのであらう。新聞や雜誌の上では、大臣も大學敎授も實業家も藝術家も一樣に「時の人」として平等の扱ひを受ける。さうしてそれ〴〵の專門的智識や技倆や經歷を持つた彼等が同じ誌上に肩を竝べて、思想や意見を發表する。讀者から見れば近衞文麿公も西田幾太郎博士も平田晋策氏も大辻司郎君も、乃至われ〳〵小說家も、その政談たると漫談たると、哲學的論文たると藝術的創作たるとを問はず、興味ある讀み物を提供する點に於いて變りはない。斯くして讀者も寄稿家も新聞雜誌と云ふ一つ箱船の乘合客となり、その全體が東京の智識階級を代表する。そこへ持つて來て婦人雜誌や三面記事の記者共は、飛耳張目してブルジョア社會のスキャンダルを素ッ破拔き、或は當事者自身が堂々と告白したり釋明したりするので、緣もゆかりもない家庭の祕事が飛んでもない方面にまで知れ渡り、まるで親類間の出來事のやうに論議される。實際東京と云ふ所は、最近の擴張に依つて面積は廣くなつたけれども、世間的には非常に狹くなつてゐる。たとへば私などがたまに出て行つて銀座のバアに現はれたり、小料理屋の暖簾をくゞつたりすると、すぐに發見されてしまふ。それは寫眞と云ふものが行き亙つてゐるからで、天ぷら屋の亭主やバアテンダーなんぞが、直きに「谷崎先生ていらつしやいますか」と來る。此の調子では東京に住んでゐる連中は一層知られてゐることゝ

思ふが、一般に、市民全體が各方面の名士連と個人的に親しくないまでも、そのくらゐな親しさを感じ、又感じるだけのゴシップ的智識を持ち合はせてゐる。勿論かう云ふ傾向は、一面に於いて文運の發達を證據立てるものであり、又ジャーナリズムの影響の及ぶところも東京だけではないだらうけれども、就中東京が特にひどい。世間が狹いことにかけては大阪も同樣ではあるが、しかし阪地は昔から「町人の都」であつて、職業的に統一されてゐ、今尙勤勉で、質素で、謙讓な商人氣質を失つてゐない。大多數の中産階級が、商科大學や專門學校を卒業した人でも、親の遺業を受け繼いで一商店の主になると、よく己れの分を守り、知らないでもいゝことを知らうとはせず、一意專心、眞つ黑になつて商賣に身を入れる。俳優などでも、いつぞや左團次が神戸へ來た時、阪神間の或る夫人を樂屋へ案內したことがあつたが、さう云ふ夫人に對する態度が東京と大阪では大變違ふ、此方では鴈治郎あたりでさへとても腰が低くておあいそがいゝが、東京の役者はサッパリはしてゐるけれどもブッキラボウである、あれでは御祝儀なんぞ出したつて受け取りもしまいし、うつかりそんな眞似をしたら怒られさうな氣がすると云ふ話であつたが、事實關西では、彼等には彼等の社會があつて、やはりその分を守つてゐるらしい。關西に新時代の俳優や劇團が出ないのも、そんな卑屈な封建的氣風があるからで、分を守ると云ふことも場合に依つては困りものだが、しかし東京のやうに天ぷら屋の親爺までが智識階級面をぶら下げ、皆座談會の名士のやうな物分りのいゝ顏つきをしてゐるのも、何となく輕佻浮薄な感を催さしめる。

○

輕佻浮薄と云ふ言葉が出たから、ついてに此處て書いてしまふが、東京及東京人の何よりの缺點は、おつとりしたところがないことてある。先年私がしきりに洋行したがつてゐた時分、或る時偶然祇園の茶屋て正宗得三郎畫伯に出遇ひ「僕も一遍巴里へ行つてみたいんだが」と云ふと「巴里は京都と同じやうな所てすよ、物靜かて、おつとりとしてゐて。此處て遊んてゐればわざ〳〵出かけるがものはないてせう」と畫伯が云つた。成る程、苟くも一國の文化の淵源てあり、地方人の憧れの的となつてゐる首府てあるからには、さうてなければなるまいと思ふ。然るに東京にはさう云ふ落ち着きがないのてある。これは年中地震があつたり風がザワ〳〵吹いたりする氣候風土にも因るのてあらう。實際、六七十年に一遍づつ市街の大半が破壞されたり、毎年冬が來るたびに何百軒もの家が燒ける土地柄ては、人の心が只管新を趁ふやうになるのも當然かも知れないが、それにしても東京人は餘りに重厚の資質に乏しく、且最も嘆かはしいことには、その乏しさから來る薄ッぺらさや哀れさに、彼等自身が氣が付いてゐないい。而も東京が日本の帝都てある以上、此の東京人の薄ッぺらさがわれ〳〵の產するあらゆる文學藝術に影響することを思へば、等閑に附すべき問題てない。いつたい東京人は何處までもイキと云ふことに崇られてゐるのて、大都會の人間に似合はず、コセコセした、四疊半式の、しん猫趣味が好きてあつて、近頃流行つてゐる小唄などと云ふものは、あれがやつぱり音曲の方の雀燒てあり、タヽミイワシてはないか。こんなことを云ふと木村莊八君なんぞに叱られさうだが、私は實にあのくらゐ東京的なものはなく、又あのくらゐ薄ッぺらなものはないと思ふ。あの中に東京人の缺點の總べてが具現されてゐると云つてもいゝ。嘗て故

岸田劉生君は伊十郎式の長唄がすたれて小三郎式のが流行するのを嘆いてゐたやうに記憶するが、東京人は江戸の昔から、上方の音曲を輸入してはそれをだん〳〵薄ッぺらなものに變へて行つたのだ。ちやうど今日の亞米利加人が歐羅巴人の優長なのを嗤つてスマートネスを自慢するのと同じ心理かも知れないが、さうして德川時代には、上方の鈍重味に代る新鮮さ、ビチビチした、魚の跳ねるやうな感覺が盛られてゐたのかも知れないが、それがもう今日の小唄になると、そんな新鮮さはなくなつて、一種の廢頽的なものが感じられる。尤も廢頽的と云つても、毒々しいものや油ッこいものが腐つたのなら文學に於けるデカダン派のやうな深みも生じようけれども、もと〳〵鮒の雀燒が日が立つたんだから、ただカサ〳〵に干涸らびたゞけて何の變哲もありはしない。但し小三郎の長唄あたりは何と云つても洗練されてゐて、鯛ほどの貫目はないにしてからが、まあ鰈ぐらゐなら品のよさがあり、先づ東京趣味の上乘なるもの、纖弱ながら健康體の音曲と云へようが、新內、都々逸、端唄、歌澤、あゝ云ふものから段々とよくない。私の親父は小さんの都々逸が大好きで、たびたび寄席へ引つ張つて行かれたので、あれは今も覺えてゐるし、又橋之助の呀えた音〆やキビ〳〵した節廻しはハッキリ耳に殘つてゐるが、さう云ふ稀な例を除いて、藝者の座敷なんぞで聞いた都々逸を想ひ出すと、私はぞつとするのである。さう云ふ私も東京時代には咽喉が自慢で、遊びに行くと矢鱈に三味線を彈かせたものだが、てもその時分から、都々逸だけは餘り唄つたことがなかつた。それと云ふのが、變に安直に氣が利いてゐるのが、蟲が好かなかつたのだ。どうせ俚謠の一種であるから卑俗なのは是非もないとして、その主題とするところは何かと云へば、吉原、

山谷、隅田川沿岸の狹斜の世界に於ける男女の痴情、てなければ奥の植半か水神の八百松あたりの微吟低酌趣味である。それも眞正面から素直に謠つてあるのではなく、例のイキガリから、愚にも付かない洒落や地口や穿ちのやうなことを嬉しがつてゐるので、氣が利いてゐると云へば云ふものゝ、全體の感じが實に薄手で弱々しい。さうして又聲の出し方が東京人獨特のものであつて、あの呀えた甲の聲、キュウッと突つ込むところ、輕くウッチャッたりシャクッたりするところ、キビキビした齒切れのいい發音、あればかりは關西人に眞似が出來ないものだから、東京人は何處へ行つてもその「江戸前」の咽喉を自慢にするのであるが、私にはあのウッチャリや突つ込みが何とも云へず氣障に聞える。大阪人の義太夫も聲の出し方が不自然ではあるが、しかし此の方は腹の底から全力的に出す。孰方が他人迷惑かと云へば、義太夫の方があくどいだけに迷惑だけれども、その何處までも堂々として、眞つ正直に語るところは、兎に角男性的であると云へるが、都々逸や端唄の名人なんと云ふものは、要するにたゞ器用に咽喉を轉がすのである。而もそんなのに限つて、さも得意さうに頤をシャクリながら、鼻の先や口の先から、細々とした、弱い、果敢ない、コマシャクれた聲を出す。私はあれを聞くと、これが大の男の出す聲かと、亡國の音を聞いてゐるやうな情ない氣がするのである。上方の地唄にも短い唄物があり、遊女の涙やきぬぎぬの別れや獨り寢の淋しさを謠つたものがあるけれども、それらの歌詞や節廻しは由來するところが深く、遠く閑吟集や松の葉の時代から傳統の絲を引いてゐるだけに、弱々しい中にも纏綿たる情緒があり、骨身に沁むやうな沈痛味があつて、決してあんな上すべりのした、安直なものではない。同じ上方の情景でも、

歌澤にある「淀の川瀨」なんかと來たら、あの二上りて「淀のウー」と出る突拍子もない唄ひ始めからして第一淀の景色ではない。どうしたつてあれは綾瀨川か市川あたりの、筑波颪の空ッ風が吹く景色だ。そして角刈りの兄哥か何かゞ錢湯で怒鳴るのに適した唄だ。元來端唄はほんの即興的なものであるから、聞き噛りに覺えたのを器用で唄ひこなすところが生命なので、師匠を取つて稽古をすべきものではないのに、それがいつの間にか歌澤と云ふ嚴めしいものになり、芝派だの寅派だのと云ふのからして馬鹿々々しいと思つたら、近頃は小唄にまで家元があると云ふ。何の事はない、鰯の目刺しを金蒔繪の膳に載せるやうなものではないか。

○

たび〳〵親父を引き合ひに出して恐縮してあるが、私の親父が或る時「お艶ごろし」と云ふのを聞いて「江戸つ兒が『お艶ごろし』と云ふ奴があるけえ、コロシと云ふんだ」と、さう云つたことがある。親父は又醬油のことをムラサキだの、おかうこのことをオシンコだのと云ふのを嫌つて「ムラサキなんて云はねえで下地と云ひねえ、ありやあ田舍者の云ふこッた」と、よくそんなことを氣にしたものだつたが、それて思ひ當るのは、どうも近頃の東京人は親父時代の江戸つ兒から見ると、何かその邊が田舍臭くなつてゐるのてはないか。明治時代の江戸趣味なるものは、林中の常盤津や默阿彌の世話物に依つて代表される、相當滋味のあるものて、いくら何ても今日のやうに薄ッぺらてはなかつたてあらう。つまり小唄が流行ると云ふのは、地方人がシンコやムラサキなどと云ひたがる類て、昔の人は果してあんなのを江戸趣味の粹な

ものと思ふかどうか、大きに「ありやあ田舍者の習ふもんだ」と云ふかも知れない。總べて物事は極端に長所を發達させると缺點ばかりが殘るやうになるもので、無闇にイキがつたり輕快がつたりした結果が、とう〳〵あんな弱々しいヒネクレたものが流行るやうになつたのであらう。で、私には今の東京人の顏が、あの小唄のやうにコマシヤクレた貧弱なものに見えてならない。彼等は多く氣の利かないことや洒落の分らないことを一代の恥辱と心得てゐる人間で、年齒も行かぬ時代から諧謔を解し、穿ちに長じてゐるけれども、彼等の云ふことには小唄のウツチヤリや突つ込みのやうな嫌味が伴ふ。さう云へば銀座の裏通りあたりには、しん猫式の小さなカフエーが軒を並べてゐるが、あれが矢張り水神や植半に代る近代式四疊半であつて、東京人はいつ迄たつてもあゝ云ふ風なひねッこびた趣味を喜ぶのである。成る程、樂隊入りでドンヂヤン囃し立てる大阪式のカフエーも俗惡ではあるが、さればと云つてあの四疊半式がよもや高級だとは云へまい。それも一軒や二軒ではなく、あゝ云ふのが實に無數にあつて、それ〳〵小さなサークルの常連を擁してゐるのである。大阪式のは俗惡でも規模が大きいだけ資本を要するが、せいぜいテーブルの五六臺も並ぶくらゐな狹い所へ、成るたけ金のかゝらない、目先の變つた造作を施し、間接照明の暗い電氣でボロ隱しをして、文學青年の喜びさうな佛蘭西語の屋號を附けたら、それで結構出來上るのだから、新奇の店が彼方此方に雨後の筍の如く殖える。尤も出來るのも簡單だが、潰れるのも早い。何しろほんの臍繰り金で、僅かな常連を賴りにしてやる仕事だから、少し客足が遠のいたら、忽ちバタ〳〵と參つてしまふ。お客の方も經營者の方も、孰方も飽きつぽいのだが、それでゐてさう云ふ

店や客が常に絶えたことはない。私は、斯くの如き有樣を見るにつけても、東京て寶塚のやうな大がかりな歡樂境の經營が成り立たないと云ふのは、眞に所以ある哉と思ふ。私が覺えてからても昔向島に太陽閣と云ふ、溫泉と料理屋と娛樂場とを兼ねたやうなものが計劃されたことがあり、その後鶴見に花月園が出來たが、太陽閣は直ぐに潰れてしまつたし、花月園とても寶塚のやうには發展しなかつた。それと云ふのが、東京人はあゝ云ふ風に切符制度や何かて大衆的に無邪氣に遊ぶことを、智識階級の沽券に關はるやうに感じるのてある。見え坊て、はにかみ屋て、そのくせ獨りよがりの彼等は、通俗とか低級とか云はれることを厭がつて衆に伍することを嫌ひ、何かしら自分だけの小天地を築かなければ承知しない。そこて彼等は彼等の趣味にかなつた小ぢんまりしたカフエーに行き、薄暗いボックスの隅に收まつて目立たぬやうに紅茶かカクテルを啜りながら、女給を相手にヒソ〳〵コソ〳〵と私語することを樂しみとする。さう云ふモボは大概洋服の身嗜みに五分の隙もなく、言語動作が垢拔けてゐて、決して喧嘩を吹つかけたり、女の頰ッペたに喰らひ着いたりするやうな不作法はしない。彼等は鄭重て、お行儀がよくて、都會人の氣取りと自信とを鼻先にぶら下げてゐ、相手の女が外のテーブルへ呼ばれて行けば、氣長に根よく待つてゐて、さてその女が戻つて來ると、いつ迄ても飽きずにしやべつてゐるのてあるが、何を語つてゐるのやら話聲が隣りの席へ洩れて來ることはめつたにない。彼等は低い優しい聲て、それも極めて言葉少なに、長い間を置いてポツンポツンと云ふ。全く、あんなことをしてゐて何が樂しみなんだか、さうしていつたい何をそんなに話すことがあるんだか、私なんぞには氣が知れないが、あれてなか〳〵

油斷のならない丹次郎が揃つてゐて、隙があらば小色の一つも稼がうと云ふ連中なんだから驚く。だが考へてみるがいゝ、もとカフェーと云ふものが、吳越同舟、入れ込みの仕組みてあるから、吉原の假宅よりはまだ落ち着きがない譯なんだが、そんな所てハタのお客に氣をかねながら二時間も三時間も「微吟低酌」しようと云ふ、その料簡が抑も甚だシミツタレたアタジケナイ話て、何しろ安直なことゝ云つたら、昔の四疊半の通人なんかは顏負けしてしまふ。東京人と云ふものが、それも血氣盛んな若い者の心意氣が、かうまてイヂ〳〵と、小さくイヂケて、ヒネクレて、小生意氣になつて來たかと思ふと、實にイヤになつてしまふのてあるが、しかし此のことは、單に青年ばかりてはない、市民全體の氣風がさう云ふ風にコセ〳〵とイヂケて來つゝあるやうに見える。

○

江戸歌舞伎の十八番、市川宗家の荒事と云つたら、暫にしろ、矢の根にしろ、助六にしろ、豪快を極めたものてあるが、あゝ云ふおほまかな、桁外れな猪突心がなくなつて、退嬰的にちゞこまつたものが今の東京人なのてある。或る大阪人が話したことに、去る大正十一二年頃、震災の少し前時分に、自分はたび〳〵商用て上京したことがあつたが、なぜか知らぬがどうも東京人の顏色が惡い、皆榮養不良のやうな青い色をしてゐて元氣がないので、此れは何か近いうちに東京が全滅するやうな變事があるのてはないか、と云ふやうな氣がした。それがあゝ云ふ形て來るとは思はなかつたが、自分には何かしらそんな豫覺があつたと云ふ。蓋し東京人の顏色に潑剌とした感じのないことは此の大阪人の說

の通りであつて、私などには、震災後の今日もそれが一向改まつてゐないやうに思はれる。尤も復興後の市街の般賑な狀況や、あの新議會の建物を始めとして諸官衙諸ビルディングの壯觀を見れば、此の都が我が大帝國の腦髓であり、此處から東亞の運命を擔ふ偉大な力が發揮されつゝあることは否定すべくもないけれども、さう云ふ國家的活動の樞軸を握つてゐる政治家や實業家や軍人などは、實際は地方人であつて、東京人ではないのである。此の人々が功成り名遂げて、或は國家から恩賞を頂き、或は銀行會社から株や慰勞金を貰ひ、相當の資産を作つて引退した後、二代目三代目あたりの當主になつてから、やうやう東京人になる。例へば先年死んだ小村欣一侯の如きはその典型的な一人であつて、侯は自ら帝國外交の前線に立つて活動してはをられたが、外交上どう云ふ功績を殘されたか、乃父壽太郎侯の赫々たる偉勳に蔽はれて目立たないのかも知れないが、私などは一向侯の功勞と云ふものを聞かされたことがない、それよりもあの人は「粹侯爵」と云はれて小說家や俳優の世話を燒き、國民文藝協會とか云ふものを作つて藝術家を奬勵することが好きであつた、本職の外交官よりもその方が性に合つてゐるらしく見えた。但し生半可の役人なんかが道樂半分に世話を燒いたつて、少しも藝術の爲めになりはしないんだが、東京人にはあゝ云ふ風なお坊つちやん育ちの「譯知り」が多いのである。彼等は食ふに困らないから、セチ辛い社會の競爭に打ち勝つて立身しようなどと云ふ奮鬪心は持ち合はせない、まあ〳〵自分の一代の間は樂に暮らして行けるんだから、出來るだけ呑氣に、うまいものを食つたり面白いものを見たりして生きて行く方が賢明だと云ふ享樂主義者が揃つてゐて、學校なんぞも始めからその考へて、美學

をやるとか哲學をやるとか、音樂學校や美術學校を出るとか云ふ風に、多くは文學藝術に關係のある修行をし、學校を出てからはその學問を役に立てゝ小遣ひ取りの閑職に就くのもあれば、これと云ふ定職もなくのらくらしてゐるのもあり、小村侯の如く本職をそつち除けにして餘計なオセッカイをするのもある。私の云ふ東京の智識階級とは實にかう云ふ連中が釀し出す一種の雰圍氣を指すのであつて、彼等は何處か肌合が藝術家風であるけれども、もと〳〵一つの藝術なり學問なりに生涯を捧げる程の熱意があるのではないから、色々なことに首を突つ込んで聞いた風な口を利くに過ぎない。かう云ふ手合がいかに帝都に多いかと云ふことは、歌舞伎、東劇、新橋演舞場等の、都下一流の劇場へ行つて、幕合に廊下をぶらつついてみると分る。年恰好は三十五六歳から五十五六歳までの、中年もしくは老年の紳士で、大概は黒つぽい澁い和服を着てゐるが、或る者はその服の下に英國製の駱駝のシャツを覗かせて、葉卷なんかを咬へてゐ、或る者は着流しのまゝ不精ッたらしく懷ろ手をして、さも〳〵遊惰の民と云ふ風體で廊下を行つたり來たりしてゐ、或る者は袴を着けてゐるが、どう云ふものかその袴が着流しよりは一層ふしだらに下品に見える。それと云ふのが、近頃の絹物は上等の品になればなる程しな〳〵してゐて腰が弱く、二三度着ると直きに疲れてよれ〳〵になるので、やう〳〵體に馴れて來た時分には、へんにぞろりとし過ぎて、遊冶郎然として、見たところが頗る品が惡い。分けて袴は昔の仙臺平のやうにシャンと突つ張つてゐてこそ立派であるのに、近頃の品は居職（ゐじよく）の職人や草鞋屋の親爺が膝へ嵌めてゐる袋のやうなもので、前掛け代りの上ッ張りに過ぎないんだから、どうかすると却つて人體が卑しく見える。そこ

へ持つて來て此の連中は、必ず紺足袋に草履を穿いてゐる。尤も劇場の中だから下駄を穿いてゐる奴もないが、あのぞろッとしたなりて、太い柱や厚い壁て幾何學的に仕切られた近代建築の廊下の間を徘徊しながら、絨毯の上を音もなく歩いてゐる姿は、當人はいゝ心持ちさうだけれども、地廻りの兄哥が戸惑ひをしたやうて、あんまり映りのいゝものてない。て、何處の劇場へ行つてみても、さう云ふのがいつもうろ〳〵してゐるんだが、彼等は孰れも身なりや人柄が似たり寄つたりてありながら、行く度毎に目新しい顔に出遇ふところを見ると、餘程此のタイプに屬する人間が多いに違ひない。關西にも遊惰の民はあるけれども、此の方は在來の茶人型かぼんち型に極まつてゐて、單純てハッキリしてゐるが、東京の近代的遊民なるものは、複雜て、不鮮明て、兩棲動物的胡算臭さを漂はしてゐて、まことに帝都獨特の產物てあり、決して京都や大阪ては見ることの出來ない種族てある。彼等の職業は、服裝からは判斷が付かない。商店の旦那のやうてもあれば華族の野良息子のやうてもあり、退職官吏のやうてもあれば私立大學の講師のやうてもあり、演藝記者のやうてもあれば藝人のやうてもある。要するに彼等は半藝人半學者半通人半批評家なのてある。ところて此の人達が、皆申し合せたやうに顏色が惡い。血色がすぐれない。皮膚が病人のやうに彈力がなくて、どす黑く濁つた、青褪めた色をしてゐる。私は此れには大いに原因があるのだと思ふが、彼等は表面裕福てはあるけれども、全く親讓りの財產に依賴してゐるのて、さなきだに中產階級が成り立ちにくゝなつてゐる今の世の中ては、內心に將來の不安がある。大阪人の如く進んて金儲けに努めるか、退いて吝嗇な生計を立てるか、孰方かにすればいゝのだが、見え坊て、贅澤て、生意氣な

彼等は、眞つ黑になつて働くのも馬鹿々々しいし、爪に灯をともして暮らす氣にもなれないし、ひたすら生活をエンジョーイせんとする。されば彼等の臺所へ這入つて見ると、大概は身分不相應な、年に少しづつ財産を減らして行くやうな無謀な暮らし方をしてゐる。さうしてゐれば老後に至つて食ふに困るやうになることは分つてゐながら、彼等にはそれが止められない。彼等は江戸人特有の呑氣と恬淡を以てその日々々を送つて行き、一向そんなことは苦にならない顏をしてゐるが、一念此處に思ひ及ぶと、ぞつと襟元が寒くなるやうな折もないではあるまい。そこで勢ひ刹那主義、姑息主義、虛無主義になつて、一日の安きを貪りながらいよ〳〵無成算に金を使ふ。昔の江戸つ兒が宵越しの錢を持たないのは、進取的積極的な心意氣から出たのであるが、今日の東京人が金錢を浪費する裏面には、明日はどうなる身の上か分らないと云ふ亡國的な悲哀がある。私はそれが、無意識のうちに彼等の顏色に現はれて、何となく意氣銷沈してゐるやうに見えるのだと思ふ。しかし私はよく知つてゐる、彼等は薄ッぺらではあるが、氣障も見え坊もたゞ上ッ面だけのことで、一人も惡人はゐないのである。みんな正直な、腹のキレイな、氣の弱い人達ばかりなのである。彼等のうちには年來の舊友も多いことだし、第一私にしてからが、據ん所なく筆一本に取り縋つて口を濕ほしてはゐるものゝ、もし親讓りの財産があつたら彼等と同じタイプの一人になつたであらうことを思へば、さら〳〵惡口なんぞ云へた義理ではないけれども、ても他人事とは思へないだけに、何だか一層悲しいのである。大阪の落語に、上方の職人が江戸つ兒の職人をおだて上げて金を使はせ、蔭で舌を出す話があつて、春團治にやらせると、關東者のおめてたい輕薄なところと、

關西人のノロマなやうて拔け目のない、腹のすわつたしぶといところとが對照の妙を極めるさうだが、考へてみると、實際笑ひごととてはない、近代型の東京人もやがては皆私の親父と同じやうな敗殘の江戸つ兒になるのてはないか。それが私の杞憂てあるならいゝけれども、此方の人のすることを見ると、數十萬の資産のある者が、東京ならば二三百圓の月給取りのやうな暮らしをしてゐる。利息て食つてゐる人などはつましい上にもつましくして、僅かづつても恒産が殖えて行くやうに心がけ、映畫や芝居を見るのにも少し入場料が高いと二等や三等て辛抱する。東京の有閑階級がしてゐるやうな享樂生活は、此方ては餘程の金滿家のすることてある。能樂や歌舞伎劇が東京を除くあらゆる都會ては既に衰微しつゝあるのに、ひとり帝都に於いてのみ今も隆盛を誇つてゐるのは、斯くの如き浪費家の市民のあるお蔭



てあり、我々の小說を買つてくれるお得意樣も彼等が大部分てあるとすると、藝術家のためにはかう云ふ人達の存在が必要な譯てあるが、上方の資本が進出して、何千人を收容するやうな大劇場が幾棟も殖え、それらが孰れも繁昌するのを見るにつけても、その反對に彼等の懷ろがますゝ痩せ細るやうに思へてならない。彼等がイキだとかオツだとかモダーンだとかシイクだとか云つて嬉しがつてゐる間に、甘い汁は利口な地方人に吸はれてしまつて、彼等はだん〳〵貧乏する。斯くの如くにして、二三十年の後には今の有閑階級は再び沒落してしまひ、新しく入り込んだ地方人が、やがて第二世第三世の東京人となるのてあらう。それを思へば此の都に落ち着きのないのも宜なる哉てある。

○

さて、さう云ふ風に顏色の惡い東京人を一方に置いて、復興後の帝都のブロックを塡めてゐる摩天樓の景觀を眺めると、私は一種不思議な感を催すのである。と云ふのは、地震のお蔭で町は確かに立派になつたが、そのために市民の不健康な血色と吹けば飛ぶやうな薄ッぺらさが、餘計目に立つやうになつた。それでなくても近代都市の蜂窩式大建築は、人間を蟻のやうに小さくしつゝあるのに、元來が安手で貧弱な彼等は、上へ上へと聳えて行く大百貨店や大ビルディングに壓し潰されて、その青い顏が一層青く、細い聲が一層細くなりつゝある。昔の詩人は「國破れて山河在り」と歌つたが、今の東京はコンクリートの橋や道路が徒らに堅牢にして人は路上を舞つて行く紙屑の如く、と云つたやうな趣がないでもない。私は過日の「陰翳禮讃」にもそのことを書いたが、いつたい日本人の皮膚や衣服には材木の生地を露はにした在來の建築が一番適してゐるのであつて、石やセメントのかたまりを積み上げゲバ〳〵しいタイルや煉瓦で化粧した大厦高樓は、やつぱりそれを發明した國民、大柄で骨太で、バタやビフテキを食つて幅の廣い聲を出す人種には向くけれども、われわれのやうなお茶漬式國民には不向きである。されば東京人の顏色の惡いのは、彼等が內心に抱いてゐる惱みのせゐもあらうけれども、一つには西洋化した街衢との對照から、尙更さう見えるのではないであらうか。尤も若いサラリーマンたちが働いてゐる商業區域では、近代式オフィスの設備と彼等の背廣姿とがよく調和して、活氣が溢れてゐないでもないが、銀座や丸ビルの賣店街に下駄や草履を引きずつて歩いてゐる遊惰の民のだらしなさを見ると、復興局の役人は東京人をいやが上にも影が薄く、情なく、安ッぽく見せようと云ふ趣意で今の新市街を設計した

のてはないのかと、恨めしい氣がするのてある。特に私はそれが婦人の容姿の上に多大の關係があることを一言したい。と云ふのは、人はよく東京の町には美人が多いと云ふ。大阪の心齋橋や京都の京極あたりをぶらついても此れはと思ふのにはめつたに打つからないけれども、銀座通りを歩いてゐると、覺えず振り返つて見たいやうな洋裝和裝さま〳〵の美人が通る、何と云つても流石は東京だと云ふ。私もそれには同感て、京大阪にも美しい夫人や令孃がゐない譯てはないのだが、此方の人は未だに深窓の佳人式て漫然と外をほッつき歩くやうなことをしない、從つて、美人が街頭を往來することは東京の特色てあるけれども、しかし私に云はせると、彼女たちの餘りにもきやしやな衣裳や體格が、周圍の建築物の重々しいスタッフに打ち負かされてゐる場合が多い。例へば大百貨店の階段の跳り場て、一人のモガに



行き遇ふとして、若し彼女が和服を着てゐるとしたら、柱や欄干の逞ましい太さに比べて、その錦紗だか御召だかの裾や袂が餘りにひら〳〵と頼りなく、輕きに失することを感じるてあらう。彼女は衣裳の好みに於いて、一點の隙もあるのてはない、着こなしも上手なら、色の選擇も氣が利いてゐる、眼の配り方、足の運び方、ハンドバッグの持ち方等、すべての擧措に遺憾がなく、その上容貌も端麗てある、が、彼女の小さなフェルト草履が踏んてゐる床の頑丈さと、彼女の背後にそゝり立つ壁の厚さへ眼をやる時に、彼女と云ふものゝ存在が聊か稀薄になることを否み難い。その感じは洋裝の時も同樣てあつて、此の場合には纏つてゐる絹物の地質の輕さよりも、彼女の肉體そのものゝ分量的僅少さが目立つ。近頃の東京の婦人は亞米利加の田舍なんぞからやつて來る觀光團の連中よりはよつぽど洋服が身に着いて來て、中に

は巴里や紐育の本場へ出しても恥かしくないやうなのがあり、四肢の均整も取れてゐるが、惜しいことには餘り小柄で充足感が缺けてゐる。現今は痩せぎすの美人が世界の流行であるけれども、痩せたと云つても西洋人の方はもと〳〵上ぜいがあるのだし、骨組みもしつかりしてゐれば、肩とか胸とか臀とかの要所要所は適當に充實して、手ごたへのある彈力性を示してゐるが、日本の女にはそれが乏しい。小さな部屋の、きやしやな家具の中ではどうやら胡麻化しが利くけれども、巨大な建築物の中へ入れると、彼女の持つてゐるほんの僅かな肉體感が悉く壓倒されて、有るか無きかになつてしまふ。私はかね〴〵日本の女の手の美しさは西洋人以上であると思つてゐるが、さう云ふ場所で眺めると、その掌（てのひら）が木の葉のやうに薄く、見だてがないので、寧ろ一種の憐憫と輕蔑に似たものを感じる。脚線美などと云ふものも、



あゝ細々として、今にも消えてしまひさうでは、さつぱり性的魅惑がない。かうしてみると、矢張り周圍の大きさや堅固さと適當の釣り合ひを保つことが必要で、さうでなかつたら美人であればあるほど滑稽な、哀れ果敢ない、コマシャクレた印象を與へる。で、大東京市の近代的景觀は立派は立派であるけれども、そこにさまよふ男女の群をいよ〳〵淋しく、味氣なく、オツチヨコチヨイに見せてゐるやうに思ふのであるが、さう感じるのは私一人だけであらうか。

○

以上私は、故郷の人の憎しみを買ふのを氣にしながら、隨分勝手な惡口を書いた。多分私の友人の中にさへ、これを讀んで怒つてゐる人があるであらうが、しかし元來調子に乘つて心にもない

毒舌を弄することは東京人の通性であるから「又谷崎が始めやがつた」ぐらゐなところで笑つて受け取つてくれる人もないではあるまい。何にしても私は、上に述べたやうな理由で東京が嫌ひなのであるが、それは或は一面に於いて今も愛着を覺えつゝある證據かも知れない。つまり私の惡口は、未曾有の天災と不躾な近代文明とに自分の故郷を荒らされてしまひ、親戚故舊を亡ぼされてしまつた人間の怨み言であるかも知れない。兎にも角にも、私には生れ故郷の人々のお羽打ち枯らしたみじめな樣子ばかりが眼について、市街の面目の一新されたことなどが、嬉しいよりは却つて遣る瀨ない涙を誘ふ。私は帝都の空を限る嚴しい穹隆や屹然たる甍を眺めながら「あゝ、素晴らしい都會になつたものだなあ」と思ふと同時に、自分の町がいつしか他人に占領されて、彼等の氣儘に改造されてしまつたやうな不滿を抱く。事實、近頃はあの都の青年男女が用ひてゐる言語てさへも、たまに出かけて行く私には、聞き馴れぬ他國の言葉のやうな耳新しさと、ガサッさと、そつけなさとを以て響く。私は既に「大阪及び大阪人」の中て東西の言語を比較したことがあるから、再びそのことをくどくは云ふまいが、それにしてもあの持ち前のカス〳〵した、乾いた聲て云ふ言葉が、何とまあ忙しなく、そゝつかしく、燕雜になつたことてあらう。嘗て岡鬼太郎氏は、姉のことを「おねえさま」と云ふ東京語はない、「ねえさん」と云ふか「おあねえさま」と云ふのが本當だと云はれたが、私の學生時分までは正しくその通りてあつた。兄のことも同樣に「おにいさま」とは云はなかつた、「にいさん」と云ふか「おあにいさま」と云つた。パパやママは論外として、「おとうさん」や「おかあさん」なども使はなかつた、私共は父を「おとッつあん」母を「おッかさん」と呼びならはし、成人の後もその稱呼

を用ひたので、明治期の東京人と昭和の東京人との間には、かう云ふ些細な言葉遣ひの末に迄も明瞭な區別の存することを知るのである。思ふに「おとうさま」「おにいさま」式の呼び方は山の手の官員さんの家庭あたりから流行り出して、いつしか純東京の下町言葉を驅逐するやうになつたのであらう。細君のことを「奥さん」と云ふのも矢張り山の手言葉であつて、下町ではどんな大店の女房でも「おかみさん」と呼ばれた。そしてわれ〳〵は中學の時分に、「僕が女房を貰つたら、おかみさんと云つて貰ひたいね、奥さんはイヤだね」などと下町つ兒の仲間同士で云ひ合つたものだが、左樣に下町の人間は、山の手言葉を野暮ッたらしい、田舍臭い、勿體ぶつた云ひ方として輕蔑してゐたのである。だが今日ではもうそんな馬鹿なことを云ふ者はゐなくなり、「おかみさん」と呼ばれるのは客商賣の女將に限られ、「奥さん」が普通になつてしまつた。言語の變遷はいつの時代のいかなる土地にもあることだから、それを兎や角云つたところで始まらないが、でも私にはさう云ふことが、他國の人に自分の故郷を乘つ取られたと云ふ感をいよ〳〵深くさせるのである。成る程今の東京辯は、昔に比べれば輕快味と纖細味を增し、語彙も豐富に、表現も自由になつてあらう。が、イキがらうとして却つて田舍臭くなり、智識階級ぶつて却つて品が惡くなつた嫌ひがないか。特に私の云ひたいことは女が男の言葉を使つたり、飜譯小說や新聞雜誌に出てゐる新語をいち早く應用したりするのは、いつの場合にも必ず地方出の人間であつて、眞の都會人は容易にさう云ふ突飛な眞似をしないものである。巴里あたりでも畫壇に新しい運動を起すのは常に外國人系の畫家達であつて、眞の巴里つ兒は傳統に對する執着が强く、なか〳〵流行に動かされないと云ふ。早い話が

「銀ブラ」などと云つて嬉しがるのは田舍者の證據であつて、東京人なら「一寸銀ブラをして來る」などとは先づ云はない、矢張り普通に「銀座をぶらついて來る」とか「散歩して來る」とか云ふ。その外アジだのデマだのオルグだのと云ふ外國人にも通用しない外國語の略稱は、恐らく無產派の作家や新聞記者などが擴めたのであらうが、あゝ云ふ風なそゝつかしい、氣が利いてゐるやうてイケぞんざいな云ひ廻しの流行ることは、どのくらゐ東京を居心地の惡い、ソワ〳〵した、慌しい氣分にさせてゐるか知れない。元來都會の人間は、言葉が純粹て正確て典雅てあることを誇りとし、こなれた、角の除れた、行き屆いた表現をするやうに心がけるのてあつて、東京語が標準語とされたのもさう云ふ長所があつたからだが、今日の如く亂脈に、田舍臭くなつてしまつては、何處に標準語の品位と權威があるかと云ひたい。取り分け私に田舍臭く響くのは、「僕そんなこと知らない」とか「君あの本讀んだことある」とか云ふ風なテニヲハを略す云ひ方てある。實にたびたび云ふことだが、從來東京語はテニヲハや前置詞の使ひ方に於いて特に周到だつたものだ。市井の町人、車夫馬丁と雖も「己あ」とか「彼奴あ」とか「あッしあ」とか云ふ風に主格を現はす「ハ」を入れた。喧嘩の時ても「何を」(ナニヨー)と云つた。「てめへ」とか「おめへ」とか云ふ二人稱代名詞には往々「ハ」が略されることがあるが、一人稱や三人稱ては大概の場合口の內てちやんとそれを云つてゐる。然るに近來は實地の會話のみならず、活字にしてまてもテニヲハを省く。あれては追ひ〳〵日本國中の青年男女があの眞似をして、支那人の片言のやうな日本語を使ひ出すてあらう。さう云へば、昔は洒落や警句の類が花柳界から流行り出したが、今はカフエーから流行り出す。だから下品て、土臭くつて、こせついてゐる

のも無理はないが、職業の區別がなくなつたやうに言語の區別もなくなつた現在は、それが忽ち全階級を風靡して、華族の夫人令孃が遊ばせ言葉と女給言葉をチャンポンに使ふ。ついてながら、もう一つ耳障りてならないのは、近頃の奥さん連が使ふ「さうづざんす」「さうづざいます」と云ふ、「てござんす」「てございます」が約まつたアレてある。文字て示すと「づざんす」「づざいます」とより外に書きやうがないが、實際は「づ」と「ざ」のつながりを曖昧にボカして二音か一音か分からないやうに、器用に嚙み殺して云ふ。あれは恐らく山の手言葉が一般化したのに違ひないが、昔の「廓言葉」のざますのやうに色氣があるのてもない、何か地道に發音するのを面倒臭がつてゐるやうな、セッカチな、嗜みのない感じを受ける。而も一層イヤなことには、それが所謂有閑マダムのダラシのない、荒んだ人柄にぴつたり嵌まつてゐるのてある。これなんぞも矢張り田舍が這入つて來たせゐて、昔の人は廻りくどくても「さうてございます」と、ちやんと鮮やかに律義に云つた、さうしてそれがギゴチなく響かないやうに、圓滑に、流暢に、齒切れよく發音するのを自慢にしたので、こんな工合にもぐ〳〵と胡麻化したりなんぞしなかつた。それにつけても氣が付くことは、近來の東京人は非常に鼻聲を使ふことが多くなつてゐる。私はこれにも何か理由があるのだと思ふ。もと〳〵東京語と云ふものは一語々々にアクセントがなく、全體の調子に抑揚が乏しく、なだらかなのを特色としたけれども、しかし昔はなだらかな中にも張りがあつたのてはないか。講談や落語に出て來る江戸つ兒は、喧嘩の時に鋭い甲聲てタンカを切る。彼等は大阪人のやうな太いドス聲は出さないが頭の腦天から高い甲走つた聲を發して、ペラ〳〵とまくし立てる。然るに今の東京人はさう云ふ氣魄が

なくなつたので言葉までが氣の抜けたビールのやうになつたのである。彼等はいかなる場合にも腹の底から聲を出さない、いつも鼻の先で輕く發音する。從つて彼等の話し聲は關西人に比べると低音であるのを特長とする。これは女子よりも男子に於いて殊に然りで、彼等が洒落や穿ちを云ふ時は、努めて曖昧に、もぐもぐと鼻へ抜いてしまつて、わざと田舍者なんぞには通じないやうに、オヒヤラカスやうに云ふ。私は今、かう書いて來てはつきり思ひ當るのであるが、東京人の影が薄いことゝ彼等が何となく廢頽的に、疲れたやうに見えることの有力な原因の一つは、全くさう云ふ話し聲と話し方にあるのだ。彼等は血色に於いてもさうであるが、就中發音と言葉遣ひに於いて生氣がない。要するにあの空ッ風の吹く町の中でうすら寒さうな顏をしながら、カサ〳〵に乾いた、蚊の鳴くやうに細い、世にも不景氣な聲を出



してしやべつてゐるのが、今の東京人なのである。

○

終りに臨んで、私は中央公論の讀者諸君に申し上げたい、諸君のうちにはまだ東京を見たことのない青年男女が定めし少くないことであらう。しかし諸君は、小說家やジャーナリストの筆先に迷つて徒らに帝都の華美に憧れてはならない。われ〳〵の國の固有の傳統と文明とは、東京よりも却つて諸君の鄕土に於いて發見される。東京にあるものは根底の淺い外來の文化か、たかだか三百年來の江戸趣味の殘滓に過ぎない。東京は西洋人に見せるための玄關であつて、我が帝國を今日あらしめた偉大な力は、諸君の鄕土に存するのだ。私は何故地方の人が一にも二にも東京を慕ひ、偏へに帝都の風を學ばんとするのか、その理由を解

するに苦しむ。例へば大阪のやうな大都會の青年男女てさへ東京と云ふと何か非常にいゝ所のやうに思ひ、何事も東京の方が上だと考へて、自分たちの言語や習慣を恥ぢるやうな傾きがあるのは、彼等をさう云ふ風に卑下させたのは、誰の罪か。近頃の爲政家はしば〳〵農村の荒廢を憂へ、地方の振興を口にするが、現今の如く帝都の外觀を壯大にし、諸般の設備を首府に集中して、田舍を衰微させた一半の責任は、彼等政治家にあるのてはないか。私は地方の父兄たちが子弟を東京へ留學させる利害についても、多大の疑問を持つてゐる。成る程東京には立派な教授や學校があり、いろ〳〵の教育機關が完備してゐるてあらう。が、前途有爲の青年を驅つて第二世第三世の東京人たらしめ、小利口て猪口才て影の薄いオッチョコチョイたらしめることは如何てあらうか。返す返すも東京は消費者の都、享樂主義者の都てあつて、覇氣に富む男子の志を伸ばす土地柄てない。但し、文學藝術だけはその限りてないと云ふ人もあらうが、私はそれにも異議がある。大體われ〳〵の文學が輕佻て薄ッぺらなのは一に東京を中心とし、東京以外に文壇なしと云ふ先入主から、あらゆる文學青年が東京に於ける一流の作家や文學雜誌の模倣を事とするからてあつて、その風潮を打破するには、眞に日本の土から生れる地方の文學を起すより外はない。ついては、いつも思ふのてあるが、今日は同人雜誌の洪水時代て、毎月私の手元へも夥しい小冊子が寄贈される。實にその數と種類とは大變なものて、印刷費と紙の代だけてもちつとやそつとの濫費てはなく、まことに勿體ない話だが、扨それらの雜誌を見ると、殆んど大部分が東京の出版てあり、孰れも此れも皆同じやうに東京人の感覺を以て物を見たり書いたりしてゐる。彼等のうちにも多少の黨派別があ

り、それ〴〵の主張があるのではあらうが、私なんぞから見ると、彼等は悉く東京のインチヤゲンチヤ臭味に統一されてゐる。彼等の關心は、東京の文化と、東京を通じて輸入される外來思想とのみに存して、自分たちの故郷の天地山川や人情風俗は、眼中にないかの如くである。で、もしもこれらの文學青年があゝ云ふ勿體ないことをする暇があつたら、東京へ出て互ひに似たり寄つたりの黨派を作ることを止め、故郷に於いて同志を集め小さいながらも機關雜誌を發行して、異色ある郷土文學を起したらばどうであらうか。今日の都會中心主義を矯め、地方の人心をその土に安んぜしめるには、文學藝術が先驅を勤めることが何よりも有效なのではないか。

# 私の貧乏物語

○

新年早々、貧乏の話は縁起でもないがと云つたら、なに、そんなことはありません、お書きになるのは暮のうちですからと、折柄原稿の催促に來た本誌の記者佐藤觀次郎君が極めて適切なことを云つた。實は先日も佐藤君をつかまへてしみ〴〵こぼした次第なのだが、毎年々々、年末になると上京して金策に奔走するのが、久しい間の例になつてしまつてゐる。だから事情を知つてゐる東京の友達は、もう谷崎が出て來る時分だがと云つたり、又掛け取りに來たのかいと冷やかしたりする。が、取るやうな掛けが

あればいゝのだが、取るべきものはイン・アドヴァンスに取りつくして、その上にも尙融通をしようと云ふのだから骨が折れる。君は東京の惡口を云ふ癖に、困れば結局東京へ出て來るぢやないかと云ふ者もあるが、殘念ながらその通りて、何と云つても取引先の九分九厘までが東京の雜誌社や出版屋なのだから、まさかの時は駈けつけるより仕方がない。しかし全く、金の用でもなかつたら東京へなぞ來たくはないのだ。外の用なら何とか來ないて濟ませるやうにしたいのだけれども、これば かりは手紙て押し問答をしてゐたのては埒が明かないし、出來る話も出來ずにしまふ恐れがあるので、不承々々にやつて來る。さうして用が足りさへすれば、親戚故舊へは義理を缺いてもすぐ上方へ逃げ歸つてしまふ。さう云ふことが、年に一回、十二月だけてはなくて、二三回、或は四五回はある。どうしてそんなにお金のいることがあ



るんてす、何かよつぽど無駄遣ひをするんてせう、と、中には忠告するつもりて尋ねてくれる人もあり、古い友人などは親身に心配してくれて、さういつ迄もその日暮らしの生活をしてゐるとはどうしたものだ、少しは老後に備へることを心がけて貯金てもする氣にならないものか、第一君の歳になつてそれては見つともないと云ふ。かう云ふ人達は、私が特に金錢に締めくゝりがなく、右から左へぱつぱつと使つてしまふやうに思ひ、暗にその點を批難するらしいのだが、しかし、まあ待つて貰ひたい、成る程私は、自分でも決して締めくゝりがある方だとは思つてゐないが、それより何より、友人達は私の收入と云ふものを過大に見積つてゐるのてある。印税や原稿料て莫大な上り高があるやうに考へ、その前提から無駄遣ひをするの貯蓄心がないのと云ふ結論を誘導するのてある。これが抑もの間違ひてあつて、先達も佐

藤君に「せめて毎月千圓あるといゝんだがなあ」と云つたら、けゞんな顔をして「へえ、千圓ありませんかねえ、無論そのくらゐはあると思つてゐましたが」と云ふのである。そこで具體的な數字を擧げ、千圓には遠く及ばない所以を說明すると、やう〳〵納得してくれたが、佐藤君の如きジャーナリストにして猶且然りなのは困ると思つて、その後某雜誌社の某氏々々などを摑まへて話してみると、大分誤解をされてゐることが明かになつたので、これでは友人達が考へ違ひをするのも尤もだと思つた。

○

斷つておくが、千圓の月收がないと云ふのは茲數年來のことで、過去にはそのくらゐあつた時代もある。で、その時代に一旦膨脹した生活費をその後徐々に切り縮めることが困難なところから、斯くの如く始終赤字に惱むのでもあるが、しかし千圓の月收と云ふことは、それ程不當な慾望であらうか知ら。勿論五百圓でも三百圓でも食つて行けない筈はないから、千圓を基準にしての貧乏呼ばはりは贅澤だと云ふ人もあらう。又、金が欲しいなら通俗小說を書くがいい、貧乏に耐へる覺悟がなくて純文藝に志したのは矛盾だと云ふ意見もあらう。さう云はれゝば即坐に默つて引き退るより外はないので、敢て千圓の月收を當然の權利だと主張するのでも、確信するのでもないのだから、そこは安心して項きたいが、それにしても何故に千圓が必要であるか、又何故に千圓を得ることがむづかしいか、と云ふ理由を、まあ愚痴だと思つて聞いて貰ひたいのである。

○

私は、文藝春秋の新年號に「職業として見た文學について」と題して、小說家稼業の必ずしも損な商賣ではないことを論じ、更に進んで他の職業よりもいろ〳〵有利な點があることを指摘してゐる。そのくらゐだから、自分が小說家になつたことを決して後悔してはゐないし、もしもう一遍生れ變つて來るとしても多分やつぱり小說家を志望するだらうけれども、あれは一般論であつて、此處に書くのは現在の私と云ふ特定な場合についてゞあるから、それとこれとを混同されては困るのである。そこで、今の私だけの苦情を云へば、もう少し怠ける時間、もう少し遊ぶ時間が欲しいのである。さう云ふと又、それは誰だつて欲しいと云ふだらうが、しかしわれ〳〵小說家に取つては、此の遊ぶ時間が實は學問や修養をする時間であり、次の創作への準備をする時間であつて、これがなくては會心の作が書けないことぐらゐは、諸君も大概御承知であらう。然るに歲を取れば取るほど、此の遊ぶ時間が餘計欲しくなる。なぜなら、若い時代には青年特有の空想力と放膽とで、知らないことでも知つたやうに書いて除けるが、老人になると、さう云ふ點が丹念にもなり、臆病にもなつて、物事を曖昧にしておくことが出來ず、合點が行くまで緻密に調べてからでなければ、筆が執れない。たとへば千利休を扱つた歷史小說を書くとして、若い作家なら一と通り參考書を漁つたゞけでも書き出すであらうが、此の頃の私なら、先づ三四年も茶の湯の稽古をしてから、と云ふことになる。而もほんたうの理想を云へば、豫め利休を書く目的で茶の湯を習ふのでなしに、茶の湯を習つてゐるうちに利休を主題にした物語が自ら構想されて來る、と、云ふやうであつて欲しいのである。だから私は、自分が昔「麒麟」だとか「刺靑」だとか云ふものを書いた當時を回想して、あゝ云ふ

題材の小説を、よくあゝ造作もなく書けたものだと思ひ、若い時分の無鐵砲さに驚くのである。つまり老人は、それだけ空想の力が弱く、事實や經驗に頼らなければ創作熱が湧かないのである〳〵が、しかし青年にも老人にもおのの〳〵長所があるのであつて、青年の無鐵砲さが成功する場合もあれば、老人の丹念さを必要とする作品もある。何はともあれ、今の私は既に老人なのであるから、一つの創作を準備するにも老人特有の凝り性と詮索癖とを發揮して、コツ〳〵と石橋を叩いて渡るやうに、氣長にかゝるより外はないが、さうなると實に、調べてみたいもの、知つておきたいもの、經驗したいものが、際限もなく見出だされて來る。畢竟それは、生活の範圍を廣く、內容を豐富にすると云ふことになるので、從つて金がかゝるのである。

○

さう云ふ意味で、比較的充分な準備を以て取りかゝれたと思ふのは「蓼喰ふ蟲」であつた。あれは、ちやうどあれを書く前に、改造社その他から圓本が出て、私などには生れて始めてと云ふ巨額な金が這入り、所謂印税成金になつたので、あの前後四五年と云ふものは殆ど生計の苦勞を知らずに、極めて悠々たる月日を過したのであつたが、その數年間の生活があの作品を生んだのであつた。尤もそれは、あゝ云ふものを書かうと思つて、生活をそれに適合させたのではない。私は、いつ、何を書かうと云ふ成心もなしに、たゞのんびりと、何も考へずに暮らした。さうして大阪毎日から長篇の依頼を受けた時にも、何か書けさうな豫感があつたゞけで、どんなものが出來るか自分にも分つてゐなかつた。第一回

の筆を執るまてはつきりしたプランの持ち合はせがなかつた。それてゐて、何の不安もなしに筆を執り、執つたらすら〳〵と書け出した。考へないても、筋が自然に展開した。あの時ぐらゐ、自分の内部に力が堆積し、充實してゐるのを感じたことはなかつた。これを以て思ふに、準備と云ふのは一定の腹案を立てゝ物語の構成に苦心したり場面や人物の出し入れを考へたりすることてはないのだ。それも準備には違ひなからうが、さう云ふことは末の問題て、それより前の、仕事と云ふものを念頭に置かない悠悠たる時間が、眞の準備なのだ。て、繰り返して云ふが、歳を取ると此の時間がだん〳〵長くなるのてある。しかしさう云つても、「蓼喰ふ蟲」の時のやうに裕福ならばいゝけれども、その後再び元の貧乏に復つてしまつたので、あれ以來それが一度も理想通りに行つたことがない。ないけれども私は、多少の無理を覺悟の上て、



と云ふのは、借金が殖えたり支拂ひが滯つたりするぐらゐは我慢をして、頑張れるだけ頑張つてみる。「吉野葛」の時は、あれは早くから腹案らしいものがやゝ漠然と出來かけてゐたが、それてもそれから足かけ三年と云ふものは頑張り通した。私は最初あのテーマを「葛の葉」と云ふ題て書きかけてみたが、吉野の秋を背景に取り入れ、國栖村の紙すき場の娘を使ふことが效果的てあることに氣が付いて、五十枚迄書いてから稿を捨てた。さうして、その年の秋の來るのを待つて、吉野山から國栖村に遊んだ。だが、たつた一回の旅行だけては心もとない氣がしたので、翌年の秋の來るのを待つてもう一度出かけ、今度は暫く山の中に滯在した。その間には和泉の信田の森にも行き、古い遊女の手紙や身請けの證文などを手に入れるために道具屋や紙屑屋を漁つた。こんなことを云ふと苦心談めいて恐縮てあるが、何も苦心を賣り

物にしてゐるのではない。なぜなら、それらの旅行や遠足や道具屋廻り等の行動は、それが一つの遊びであつて、必ずしも創作を書き上げるためにのみ拂はれた努力ではないから。しかし同時にさう云ふ遊びを許してくれないことには、思ふやうなものが書けないことも事實であつて、現に私は二三年來腹案のまゝで持ち越してゐるものが一つや二つはあるのである。

○

遊びの種類にもいろ〳〵あつて、旅行や遠足ばかりではないから、費用も殆ど際限がない譯であるが、その上に一家を支へて行く經常費、弟妹その他の係累に對する仕送り、などと云ふものを勘定に入れると、千圓なら安いとは云へなくもない。しかしさう云ふ算珠盤の彈き方、乃至さう云ふ生活のしかたを贅澤と認め



る人々には、私の貧乏物語は成立しないことになるから、それを認めてくれる人々だけに、然らば何故その千圓を稼ぐのが困難であるか、と云ふ理由を聞いて貰はう。そこで、上に述べたやうな遊びの時間はそつくり食ひ込みになるのであるが、その間を如何にして繋いで行くかと云ふと、印税、及び印税と原稿料との前借、それから諸種の支拂ひを先へ〳〵と繰り延べて行くと云ふ手段、この三つより外にない。此のうち、正當な收入は印税だけで、他は悉く積極的か消極的かの負債であることは申すまでもないが、正當な收入だけでは到底支出をカヴーするに足りないから、自然負債が殖えることになる。ところで、やがて一つの作品が完成された時に、その原稿料や印税を以て、遊びの間に生じた負債を償却することが出來るかと云ふのに、これがさう行かないのである。たとへば「吉野葛」であるが、前陳の如き準備の後に出來

上つたものとして、あれは原稿用紙にすると百十枚の小篇てしかない。だから原稿料にしても知れたものだし、單行本にするのには枚數が足りない。さう云ふものを二三年に一度書いたのては引き合ふ筈はないので、結局、こゝ數年來の私は、遊びの時間を次第に縮めて行つて、平均年に一回ぐらゐは、百枚乃至百五十枚程度の創作を書くやうになつた。けれども、それてもまだ借金が殘るところから、苦し紛れにいろ〳〵の手段を講ずるのてある。われ〳〵に取つて、何と云つても一番望ましいことは本が澤山賣れてくれること、即ち印税が這入ることて、これは原稿料と違ひ、働かないて儲かるのてあるから、私のやうな怠け者にはこれ程うまい話はないので、一度出版したものを、裝釘を變へ、定價を變へ、出版書肆を變へ、廉價版、或は豪華版などと名目を變へて、二度も三度も出版する。二三の例を擧げるなら「蓼喰ふ蟲」は改造社



から單行本として一度、全集の中の一篇として一度、春陽堂の廉價版叢書の一冊として一度、と云ふ風に三度出てゐる。「蘆刈」も二度、「春琴抄」も二度てあるが、近いうちに又追つかけて、三度目、四度目が出るかも知れない。これらは書肆の勸誘に依る場合が多く、必ずしも作者が計畫するのてはないが、さうして必ずしも金儲けのためばかりてはないが、しかし今も云ふやうな事情がなかつたら、出したくないと思ふことも度々ある。少くとも一つの本の賣れ行きが止まつてゐないのに、その同じものを、それと餘り違はない定價で他の本屋から出すと云ふのは、出版道德上面白いことてはないから、私に財産がありさへしたら、多分許しはしないてあらう。いや、私ばかりてはない、他の多くの作家諸君も、恐らく私と同感てあらう。が、又世の中はよくしたものて、讀者の數は大體極まつてゐるのだから、形を變へて蒸し返したからと云

つて、さう一つ本が一定量以上に賣れはしない。故に此の手段にも自ら限度があることを知らねばならない。

○

それから、こゝにもう一つ、私が貧乏してゐる重大な原因は、遲筆と云ふことに存するのである。これは原稿の催促に來る記者諸君にはいつも訴へてゐるのだけれども、その程度が如何に甚しいかと云ふことを本當に諒解してくれてゐるのは、私と起居を共にする家族の人達だけであつて、記者諸君などは好い加減に聞いてゐるらしいのが殘念でならない。實は私も、凝り性とか彫琢の苦心とかを看板にしてゐるやうに思はれるのが嫌であるから、くどくは說明しないのであるが、私の遲筆はそんな殊勝な理由よりも、主として體力の問題なのである。私はじつと一つこ



とを考へ詰めると、精神的にも肉體的にも直きに疲勞する。だから二十分とは根氣が續かない。これは若い時分から糖尿病があるせゐなのだと思つてゐるが、兎に角そんな次第であるから、原稿用紙に向つても、煙草を吸ふとか、湯茶を飲むとか、小用に立つとか、十分二十分置きぐらゐにいろ〳〵な合の手が這入る。さう云ふ風にして一息入れては氣を變へないと、思考を集注することが出來ない。それで、たま〳〵或る一個所に行き惱むと、此の、立つたり、坐つたり、飲んだり、吸つたりが、いよ〳〵頻繁に繰り返される。一服吸つてみて五分か十分じつと原稿を睨みつけて、巧く行かないと今度は茶を飲んで又睨める。それでも駄目だと小用に立つて、ついでに庭を歩いて來てから又原稿にしがみ着く。行き惱み方が激しい時には、原稿が私を撥ね返してゐるやうに感ぜられて、ほつと溜め息をつきながら仰向けに臥轉んでしまひ、

天井を視詰めたまゝ三十分、一時間を空費する。かう云ふことは私ばかりに限らないであらうが、私は殊に此の習慣がひどいのであつて、一時間のうち正味執筆に費す間は十分から十五分を出てまいと思ふ。尤もこれは創作の場合で、隨筆の時は別だけれども、此の計算が誇張でない證據には、文字通り一日かゝつて、と云ふのは、洗面と、食事と、入浴と、朝夕の新聞を讀む時間以外は原稿と取つ組み合つてゐて、最も成績のよい時が四枚、惡い時が二枚なのである。若い時分には十枚と云ふレコードもあつたが、此の數年來はます〳〵衰へるばかりであつて、最近の記憶を辿つてみても、「春琴抄」と「蘆刈」が三枚半乃至四枚、「夏菊」が二枚半乃至三枚と云ふ程度である。が、未だに苦しかつたことを覺えてゐるのは、「盲目物語」を書いた時であつた。あの時は高野山に立て籠つて訪客を避け、一意專心仕事に沒頭したにも拘らず、あの二百枚の物語を脱稿するのに、最後まで日に二枚と云ふ能率を越すことが出來なかつた。だからあの作品は、準備の時間は別として、百日以上、多分完全に四箇月を要してゐるのである。さうしてこれは、晝夜兼行、時には夜中の二時三時まで机に向つてゐての成績で、もしその間に客に接するとか、手紙を書くとか、散歩に出るとかしたならば、忽ち影響を來たすのである。

○

もしも私に遲筆の病がなかつたならば、今の私が一日を費して書く分量を午前中にても書き終へることが出來たならば、午後の半日は悠々自適出來るのであるから、特に「遊びの時間」と云ふものを設けるには及ばないであらう。事實、多くの作家達はさう云ふ風にして日々一定の仕事をした後に、散歩をするとか、讀書

をするとか、友達に會ふとか、雜務を處理するとか、してゐるのてあらう。又、人に依つては一箇月の仕事を一週間か十日の間にカタメて果たしてしまひ、殘餘の時日をのんびり暮らすと云ふ方法も取れよう。ところが私はさう云ふ時間の使ひ分けが出來ないのてあるから、少し長いものを書き始めると、享樂方面のことは勿論、冠婚葬祭の義理までも缺くやうになる。それが一と月にも二た月にもなると、さうは世間と沒交渉てゐられないから、いろいろ邪魔が這入つて來る。さうするといよ〳〵仕事が後れる。すると今度は、やつと仕事が片附いても遊びの時間を取る暇がなく、次の仕事にかゝらなければならぬ。斯くの如くにして昨今の私は、時間の上に遊びと仕事とのけじめが付かなくなつてしまひ、毎日机に向ひながら、その間にちよつと手紙を書いたり人に會つたり散歩に出たり、座右にある書物を拾ひ讀みしたり、と云ふやうになりつゝある。從つて、仕事の方も遊びの方もしんみりと身に着かないて、始終そは〳〵してゐるのてある。

○

邪魔のうちても何より辛いのは、一つの仕事に熱中してゐる時に、他の雜誌社から別の仕事を持ち込まれることてある。かう云ふ場合には斷つてしまへばよいのだけれども、それが出來ないと云ふのは、何處の雜誌社にも不義理をしてあるからてある。早い話が、私は今月の文藝春秋と、改造と、中央公論とへ三つの隨筆を書いた。中ても文藝春秋のは未完てあつて來月號まて續くのてあるが、もし此の三つを書く代りに執れか一つへ力を集注したならば、遙かに讀み應へのあるものが出來るてあらうし、作者としてもどんなにその方が望ましいか知れない。しかし雜誌社

にしてみれば、金を貸した上に一年以上も引つ張られて、新年號にも間に合はしてくれないては困ると云ふ、當然の理窟があるのである。で、私の遣り繰り算段と云ふのは、出版屋や雜誌社の間をぐる〳〵廻りしながら、A社の借りが嵩んだ時分にB社で借り、B社の方が嵩んだ時分にC社で借り、C社の分が嵩んだ時分にそろ〳〵A社へ戻るやうにする、と云ふやうな心づかひに費される。さうしてさう云ふ心づかひをする一方で絶えず原稿を書くのであるが、近頃ではABC等各社の借金がキレイになつたことは一度もなく、常に少しづつ何處の社にも殘つてゐるのである。

○

最近、私が創作よりも隨筆の方を多く書くのは、隨筆ならば疲れた時には人を頼んで筆記して貰ひ、口授をしながら進められるので、以上のやうな邪魔や遣り繰り算段と闘ひつゝも、又その間に遊びの時間を適當に割り込ませつゝも、どうにかやつて行けるからである。されば、隨筆は私の遊びの時間を支へるところの手段であつて、正直を云へば創作の方が書きたいのであり、腹案も出來てゐるのだけれども、かう苦しくては中々腰を落ち着ける餘裕が得られない。などと、つい下らないことをしやべつてしまつたが、此の貧乏物語もさう云ふ事情で書いた原稿の一つであることを、宜しく御諒察願ひたいのである。